

興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ

2018

興福寺





中室大房北端部（A区）全景（北から）



中室大房南端部（B区）全景（北西から）



経蔵（C区）全景（北から）



鐘楼西北部（D区）全景（北西から）

序

『興福寺境内整備構想』は、学識経験者・文化庁・奈良県・奈良市の担当者による8年間にも及ぶ協議を経て、平成10年2月に策定され、当山はそれ以来、「天平の文化空間の再構成」を合言葉に境内の史跡整備事業を推進している。

整備は興福寺研究の第一人者で建築史家大岡實先生の研究成果が基本となり、さらに研究を深められた興福寺境内整備委員会座長で建築史家鈴木嘉吉先生の学識によるところが大きい。

大岡先生は、興福寺は非常に災害が多かったが、その再建は保守的で創建の平面を厳守して来たので、その遺構によって奈良創建の規模が判明する点は貴重である、と述べられた。

奈良文化財研究所による中金堂・回廊・中門・南大門・北円堂回廊・西室、そして今回報告する中室・経蔵・鐘楼の地下遺構の調査で、そのことが次々に証明された。

そして、この成果を踏まえて設計施工された中金堂再建落慶法要が、10月に予定されている。

大岡先生、鈴木先生の学恩に感謝する次第である。

平成30年3月

興福寺貫首 多川俊映

目 次

序	5	地中レーダー（GPR）による探査成果	24
目 次	6	放射性炭素年代測定	27
1 調査経過	3	7 成果と課題	30
2 中室・経蔵・鐘楼の歴史と建築	4	（1）中室の調査成果	30
（1）中室・経蔵・鐘楼の歴史と既往の調査	4	（2）経蔵・鐘楼の調査成果	31
（2）中室・経蔵・鐘楼の建築	6	（3）建物周囲の様相	32
3 遺 構	8	報告書抄録	34
（1）調査前の地形と基本層序	8		
（2）中室（A・B区）の遺構	8		
（3）経蔵（C区）の遺構	13		
（4）鐘楼（D・E区）の遺構	16		
4 出土遺物	18		
（1）瓦磚類	18		
（2）土 器	21		
（3）金属製品	22		
（4）冶金関連遺物	23		
（5）植物遺存体	23		

例 言

1. 本書は興福寺第1期境内整備事業にともなう2015年度の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は興福寺の委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部（平城地区）が、2015年10月2日から2016年1月15日にかけて実施した。
3. 調査は、神野 恵・林 正憲・桑田訓也・大橋正浩が担当し、岡 紗佑里・高左右 裕・土橋明梨紗（いずれも奈良大学大学院）、道上祥武（大阪市立大学大学院）、森脇智子が参加した（所属は当時）。石材の鑑定には、脇谷草一郎・田村朋美（当研究所埋蔵文化財センター）があたり、石材の加工については、高田祐一（当研究所企画調整部）の教示を得た。
4. 調査にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第559次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準にしたがい一連の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第VI系）による。
6. 本書の作成は、副所長・渡辺晃宏の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議を経ておこなった。編集は桑田が担当し、各項は執筆を分担した。執筆者は執筆箇所の末尾に示す。
7. 遺構・遺物の写真は、中村一郎・栗山雅夫・杉本和樹・鎌倉 綾・飯田ゆりあが撮影した。
8. 2015年度発掘調査の概要は、すでに『奈良文化財研究所紀要2016』にて報告している。本書はその報告を改めて検討した成果を示しており、こちらを現段階での正式な見解とする。

1 調査経過

今回の調査は、興福寺中室・経蔵・鐘楼を対象とした。

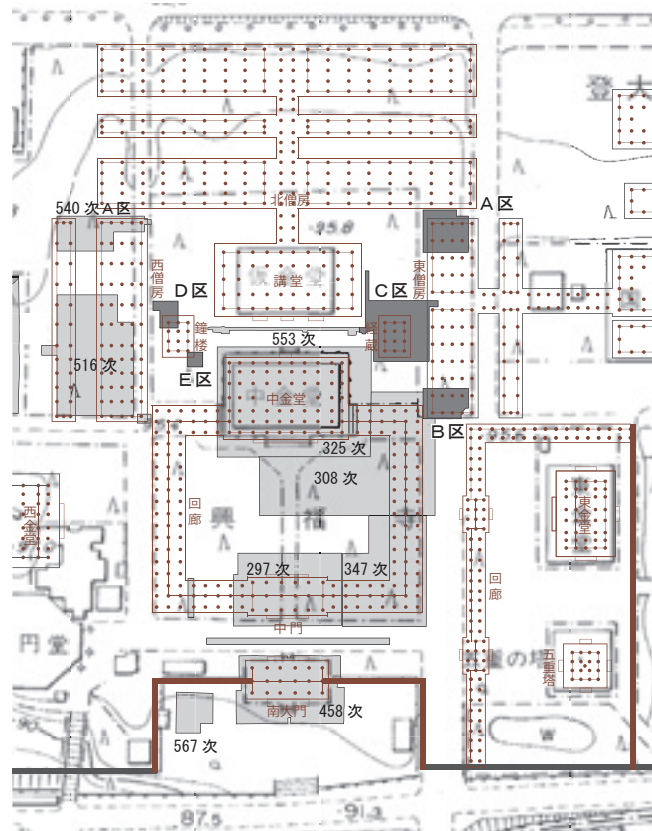
興福寺では「興福寺境内整備基本構想」(1998年)に基づき、寺観の復元・整備が進められている。これにともない、奈良文化財研究所(以下、奈文研)では、1998年以来、中金堂院、南大門、北円堂院、西室(西僧房)などの発掘調査を継続しておこなっている。この事業の一環として、2015年度には中室(東僧房)、経蔵、および鐘楼を対象として調査を実施した。本報告は、その概要報告である。

調査区は、5ヵ所に設定した。これらをA・B・C・D・E区と呼称する(第1図)。A区は中室大房北端部202㎡、B区は同南端部148.5㎡、C区は経蔵406㎡、D区は鐘楼西北部54㎡、E区は同東南部25㎡である。調査面積は計835.5㎡で、うちB区の29.5㎡は1999年度の第308次調査区と重複する。A・B区は中室大房の規模の確認、C区は経蔵の全容解明、D・E区は鐘楼の規模の確認を主な調査目的とした。また、調査開始後、中室北面の基壇外装の全容を確認するためA区を北に、経蔵北方で検出した石組溝と西方で検出した玉石敷の全容を確認するためC区を北と西に、鐘楼北方で検出した石組溝の全容を確認するためD区を北に、それぞれ拡張した。上記の面積は、拡張後のものである。

調査は2015年10月2日より開始し、2016年1月15日に終了した。調査の結果、中室・経蔵の創建当初の建物規模とその後の再建の様相、鐘楼の室町時代以降の建物規模、および経蔵・鐘楼の基壇周囲の様相などがあきらかとなった。(桑田訓也)

第1表 調査経過

2015年	
8月6日	縄張り
9月29日	現地協議
10月2日	重機掘削開始(～10月16日)
10月5日	手掘り調査開始
10月14日	鐘楼(D区)写真撮影
10月23日	経蔵(C区)写真撮影
10月29日	中室(A・B区)写真撮影
11月6日	写真撮影(D・C区)
11月9日	C区拡張
11月10日	D区拡張・E区重機掘削開始
11月13日	写真撮影(C区)、A区拡張
12月2日	写真撮影(A・B・C・D区)
12月4日	現場検討会
12月10日	写真撮影(ハイライダー、全調査区)
12月16日	石材鑑定
12月18日	記者発表
12月20日	現地見学会(来場者1,200名)
12月22日	写真撮影(C区)
12月25日	写真撮影(E区)
2016年	
1月6日	中室未調査部分(A区とB区の間)の地中レーダー探査
1月7日	写真撮影(C区基壇東側下層瓦溜)、羽目石加工痕採拓(A・C区)
1月14日	A・B区砂撒き完了
1月15日	C・D・E区砂撒き完了、調査終了



第1図 第559次発掘調査位置図 1:2500

2 中室・経蔵・鐘樓の歴史と建築

(1) 中室・経蔵・鐘樓の歴史と既往の調査

興福寺は、中金堂と講堂の東・北・西をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、東僧房は「中室」、北僧房は「北室」、西僧房は「西室」と呼ばれていた。中室は、西室と同じく、梁行が大きな大房の外側に梁行の小さな小子房が柱筋を揃えて並立する構造で、北室は南から上階僧房・小子房・下階僧房の3棟が並列していたとされる。経蔵と鐘樓は、中金堂・講堂と三面僧房との間に位置し、経蔵は中金堂の北東に、鐘樓は北西に建てられた。

創建 中室・経蔵・鐘樓の創建については、『興福寺流記』（以下、『流記』）が基本史料となる。『流記』には各時期の資財帳が引用されており、中室を含む三面僧房については、「三面僧房、〈天平十六年記云、〉」としてその規模を記していることから、天平16年（744）以前に創建されたと考えられる。経蔵については「宝字記同之」、鐘樓については「宝字記亦爾也」との記載から、天平宝字年間（757～765）以前の創建とみることができる。

一方、『流記』の別の部分では、「鐘樓・経蔵・三面僧房・政所・雑舎・倉等、本願之御時所造立也」と記されている。これによれば、創建は本願すなわち藤原不比等が生存中の養老4年（720）8月以前に遡ることとなる。中室（を含む三面僧房）・経蔵・鐘樓は、養老4年8月以前に造営に着手され、中室は遅くとも天平16年以前、経蔵・鐘樓は天平宝字年間までには完成していたとみて差し支えないだろう。

「中室」の初見 三面僧房の東僧房が東室ではなく中室と呼ばれるのは、そのさらに東、現在の興福寺本坊の位置に、別の僧房があったためである。この最も東の僧房が建てられたことにともない、三面僧房の東僧房は、相対的な位置関係から、中室と呼ばれるようになったと考えられている。

中室の呼称の初見は、平城京左京一条三坊十五・十六坪の東に面する東三坊大路の東側溝SD650から出土した木簡である（『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈文研、1965）。積文は下記のとおり。

告知 往還諸人 走失黒鹿毛牡馬一匹^{在験片目白}_{額少白}

件馬以今月六日申時山階寺南花蘭池辺而走失也 九月八日

若有見捉者可告来山階寺中室自南端第三房之

長さ993mm・幅73mm・厚さ9mm 051型式

内容は「山階寺南花蘭池辺」すなわち今の猿沢池辺りで行方不明になった馬の搜索願で、告知札と呼ばれるタイプの木簡である。木簡の年代は、共伴遺物の年代観から平安時代初期の天長年間（824～834）頃とみられる。馬を捕らえたときの連絡先として「山階寺中室自南端第三房」が見え、南北棟建物とみられる点も矛盾しない。したがって、この頃までには東室も成立していたと考えられる。

焼失と再建 中室・経蔵・鐘樓は、建立以後7度もしくは8度罹災したとみられる（第2表）。文献に見える最初の火災は元慶2年（878）4月で、失火により「堂宇僧房」が焼けた。元慶5年9月に遠江以下10カ国の稲穀が「鐘樓僧坊」を造る財源に充てられていることから、元慶2年に焼けた堂宇に鐘樓が含まれることは間違いない。後世の史料に永承元年（1046）の火災をもって最初の大火災とする認識がみえる点を重視すれば、このとき中室と経蔵は火災を免れ、被害は伽藍の西部でおさまった可能性が高い。その後の火災では、中室・経蔵・鐘樓は揃って焼亡している。平安時代までは、中室・経蔵・鐘樓はほぼ同時に再建されているが、治承4年（1180）のいわゆる南都焼き討ち後は、中

第2表 興福寺中室・経蔵・鐘楼略年表

和暦	西暦	中室	経蔵	鐘楼	備考	典拠
	720頃	創建	創建	創建		
元慶2	878	?	?	焼失		『日本三代実録』
元慶5	881	?	?	再建	鐘楼を造る料を充てる	『日本三代実録』
永承元	1046	焼失	焼失	焼失		『造興福寺記』『扶桑略記』ほか
永承3	1048	再建	再建	再建	中金堂院・南円堂供養	『造興福寺記』『扶桑略記』
康平3	1060	焼失	焼失	焼失		『康平記』『扶桑略記』『三会定一記』
治暦3	1067	再建	再建	再建	金堂・講堂ほか供養	『興福寺流記』
永長元	1096	焼失	焼失	焼失		『中右記』『後二条師通記』ほか
康和5	1103	再建	再建	再建	金堂・講堂供養	『中右記』
治承4	1180	焼失	焼失	焼失		『玉葉』
養和元	1181		再建	再建		『養和元年記』ほか
	1200以降	再建				『春日大社文書』16
建治3	1277	焼失	焼失	焼失	中室北端房に落雷	『興福寺略年代記』ほか
弘安8	1285	再建	(再建年不明)	(再建年不明)	中室馬道は完成	『三会定一記』
嘉暦2	1327	焼失	焼失	焼失		『大乘院日記目録』ほか
応永5	1398	(再建年不明)	再建	再建		『寺門事案々開書』
享保2	1717	焼失	焼失	焼失		『南都年代記』

参考文献

太田博太郎 『南都七大寺の歴史と年表』 岩波書店、1979。
 数中五百樹 『奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦』 『南都仏教』 64、1990。
 数中五百樹 『平安時代に於ける興福寺の造営と瓦』 『仏教芸術』 194、1991。
 数中五百樹 『鎌倉時代に於ける興福寺の造営と瓦(上)』 『仏教芸術』 257、2001。
 数中五百樹 『南北朝・室町時代に於ける興福寺の造営と瓦』 『立命館大学考古学論集Ⅱ』 2001。
 数中五百樹 『安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦』 『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅶ』、2005。

室と経蔵・鐘楼とで再建のタイミングにズレが生じ、以降も詳細は不明ながら再建に時期差がみられるようである。なお経蔵は、江戸時代以前のある段階から鼓楼と呼ばれるようになっていく。

廃絶 中室・経蔵・鐘楼は、享保2年(1717)の焼失以後は、再建されることなく現在に至っている。ただし、中室の小子房は宝永5年(1708)の「興福寺伽藍春日社境内絵図」に見えないことから、それ以前に廃絶していたらしい。

既往の調査と復元 中室については、1956年におこなわれた食堂の発掘調査の際に、小子房の東・南面の基壇外装(凝灰岩製の地覆石、羽目石および葛石)とその外周の石敷を検出している(『興福寺食堂発掘調査報告』 奈文研、1959)。また1976年の水道管理設工事にともなう調査では、大房南辺柱列の礎石と地覆石を検出している(『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』 興福寺、1978、以下『防災報告』)。1998年の第308次調査では、それと一部重複する位置で大房の西南隅を調査し、新たに西辺柱列の礎石を検出している(『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』 興福寺、2000、以下このシリーズは『概報Ⅱ』、2000のように記す)。鐘楼については、1975年におこなわれた水道管理設工事にともなう調査で、中金堂・講堂と鐘楼との間において、地表下0.4mで人頭大の石を用いた石敷を検出している(『防災報告』)。これらはいずれも建物のごく一部もしくは建物周辺の調査であり、中室・経蔵・鐘楼の本体に関わる本格的な調査は今回が初めてである。

これまでの建物規模の復元は、『流記』と地表に露出している礎石の実測を根拠にしたものであった。中室大房については、大岡實による案(『南都七大寺の研究』 中央公論美術出版、1966)と、鈴木嘉吉による案(『奈良時代僧房の研究』 奈文研、1957)がある。両案とも梁行方向は4間、総長45尺とするが、大岡案は桁行9間、総長は202.5尺、柱間寸法は22.5尺等間とし、北室との規則性を重視する。これに対し鈴木案は、桁行11間、総長は210尺、柱間寸法は北から5間目のみ20尺で他は19尺とする。鈴木案は食堂の発掘調査成果をふまえ、講堂と食堂とを結ぶ軒廊が中室大房と小子房を馬道として貫き、その部分の柱間が他と異なるとみる。また、経蔵・鐘楼については、大岡實による案(『南都七大寺の研究』 [前掲])があり、これまでに大きな異論は出されていない。大岡案は、経蔵・鐘楼いずれも桁行3間で総長34尺、柱間寸法は中央間が12尺で両脇間は11尺。梁行は2間で総長22尺、柱間寸法は11尺等間とする。(桑田)

(2) 中室・経蔵・鐘樓の建築

『興福寺流記』にみえる中室・経蔵・鐘樓 『流記』では、僧房について、「三面僧房、〈天平十六年記云、〉」として、東西僧房と北僧房について記し、中室という名称は用いていない。東西僧房については、「東西僧房二間、〈各高一丈六尺六寸、広四丈五尺、宝字記云、二丈、長十一間、々別一丈九尺、宝字記云、廿丈二尺、〉小子房二間、〈各高一丈二尺、広一丈五尺、長同大房、宝字記同之、〉」と記す。すなわち東室と西室は、大房と小子房のセットで、桁行は11間で柱間は19尺、大房の梁行は45尺という。桁行総長は柱間寸法が19尺等間とすれば、計算上209尺となるが、宝字記では202尺という。中室はこの東室に相当するものとみられる。

一方、経蔵と鐘樓については、「経蔵一基、〈長三丈四尺、延暦記、二尺文、広二丈二尺、宝字記同之、延暦記云、柱高一丈九尺、角架并高欄端、用裁金銅銜云々、〉鐘樓一基、〈同経蔵也、弘仁記云、長四丈六尺、広三丈五尺三寸、高二丈云々、宝字記亦爾也、〉」と記す。すなわち、経蔵は桁行34尺、梁行22尺で、延暦記によると柱高は19尺という。鐘樓も経蔵と同じとあるが、弘仁記では桁行46尺、梁行35.3尺、柱高は20尺で、宝字記も同じという。これらから、鐘樓は8世紀中頃～9世紀初頭には経蔵より桁行・梁行とも柱間1間分程度（桁行12尺、梁行13.3尺）大きかったことになる。規模の拡大や縮小には建替に近い工事をともなうが、鐘樓を建て替えた記事は見えない。その他の後世の史料でも、基本的には両樓はほぼ同大で記載されている。後述するように、両樓は後世の絵画資料では下層をスカート状とする袴腰に描いており、この出は6尺ほどであるから、全体では12尺ほど平面が大きくなる。この袴腰下端の規模を記したとすれば、およそ基壇に近い規模となり、軒の出との関係からみても齟齬はない。したがって宝字記と弘仁記は袴腰を付加した規模を記している可能性がある。

『興福寺建築諸図』にみえる鼓楼と鐘樓 東京国立博物館が所蔵する『興福寺建築諸図』は、享保2年(1717)に伽藍中心部が火災に遭う前後に描かれた指図類で、享保火災後の復興計画の一端を知ることができるとともに、焼失した室町時代初めの堂塔の概略をも知りうる重要な資料と評されている(濱島正士「『興福寺建築諸図』(東京国立博物館蔵)について」『MUSEUM』No.461、1989)。鐘樓と鼓楼については、建地割図(断面図)が計3葉描かれている。『奈良文化財研究所紀要2016』(以下、『奈良研究紀要2016』のように記す)では、大橋正浩が主としてその平面について考察しているが、ここではそれらを再度検討し、図の特徴などについて述べておきたい。まず3葉の指図を紹介する。

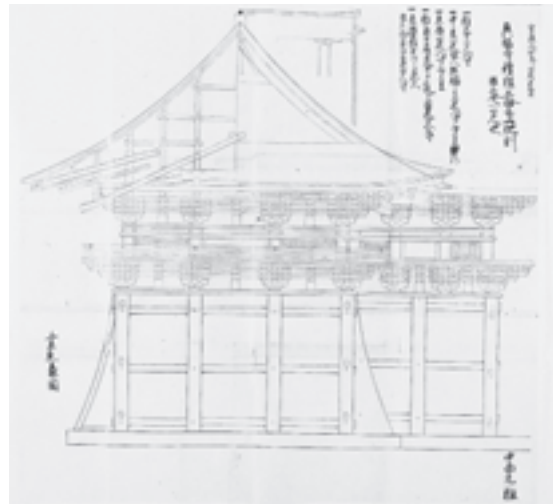
2葉は鐘樓、1葉が鼓楼の指図である。鐘樓の2葉は、一つめが①中西元雅による享保2年2月29日の銘をもつ1/30縮尺の指図で、もう一つは、年紀がないが②中西広保による1/20縮尺の指図である。②も①と同時期の製作と見てよいだろう。鼓楼の一葉は、③中西広保による享保2年3月23日の銘をもつ1/20縮尺の指図である。火災があったのは同年1月4日であるから、いずれも火災後に描かれた図であり復興計画案と考えられる。

これらは、いずれも梁行3間で袴腰付き楼造の建物を描く。柱間寸法が判明するのは①で、「一中ノま一丈式尺但脇ノま一丈八寸ふたま梁行」、「一東西一丈八寸ふたま」と書き込みがある。すなわち、梁行中央間が12尺、両脇間が10.8尺、東西方向が2間で各10.8尺という。②・③には寸法の書き込みがないが、大橋の検討によれば、②は中央間が11尺程度、両脇間が10.5尺程度、③は中央間が12尺、両脇間が10.8尺とみて問題ないという。これらは柱間寸法に若干の出入りがあるものの、発掘調査成果の南北3間(中央間12尺、両脇間11尺)、東西2間(11尺等間)におよそ合致し、大橋も指摘するように、当時の礎石上に再建しようとした計画図とみられる。

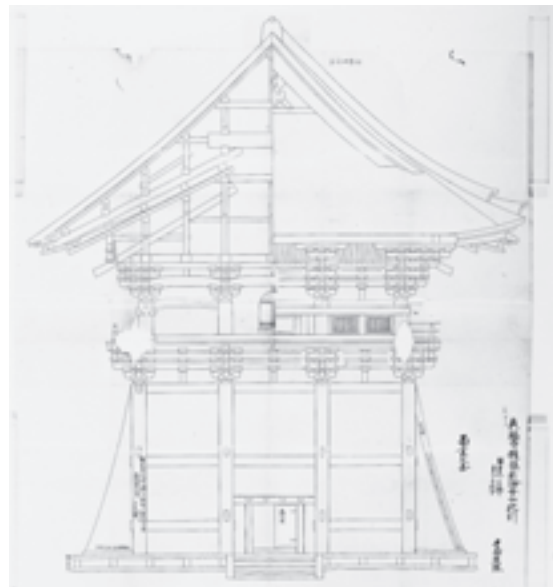
基壇は②・③では壇正積基壇を描き、②では高さが2尺という。中央間には3級の階段を描く。下層袴腰の出は②・③に6尺とあり、柱高は②で21.3尺、③で21尺という。基壇の大きさは、図の計測により50尺前後を測り、これが東西面の基壇規模となる。上層の組物は尾垂木を備えた三手先で、軒は二軒とし、下層柱心からの軒の出は、①では14.7尺、②・③では12.5尺前後と計測できる。

ところで、これらの図を信用すると、鐘楼と鼓楼は東西棟と考えなければならない。享保焼失前の建物の様相を示すと考えられる『春日社寺曼荼羅』では、両楼は南北3間、東西2間で入母屋造の南北棟に描かれている。これらの指図のうち、①は下層に台輪を入れて東西面の腰組を3間に割り、東西面の上層も柱間3間とするが、入母屋造の屋根は、大棟が梁行3間分に及んでおり、桁行を2間に納めることは不可能である。このほか、①は下層に頭貫を入れない、平と妻の尾垂木が交差してしまうなど、建築的にやや問題がある図となっている。②は入母屋破風の虻羽の出が大きい、もしくは妻側の屋根の勾配がきついとみられ、野垂木を大きく振れ隅とすれば、納まらなくもないが、大棟の短さは否めず、上層の尾垂木が正背面と両妻でやはり交差してしまう問題点がある。③は少なくとも尾垂木の交差は避けているので、3葉の図の中ではもっとも納まりがよい、現実的な図になっている。ただし、やはり桁行2間の入母屋造とすれば、大棟の長さの問題は解消されず、野隅木を大きく振れ隅に納めることが必要となる。建築的な納まりを熟知しているはずの大工が、自ら建築的に無理がある計画図を描くとは思えず、火災後の復興に当たって、もとの礎石を用いながら、両楼を東西棟にするような、施主の強い希望があったことをうかがわせる。

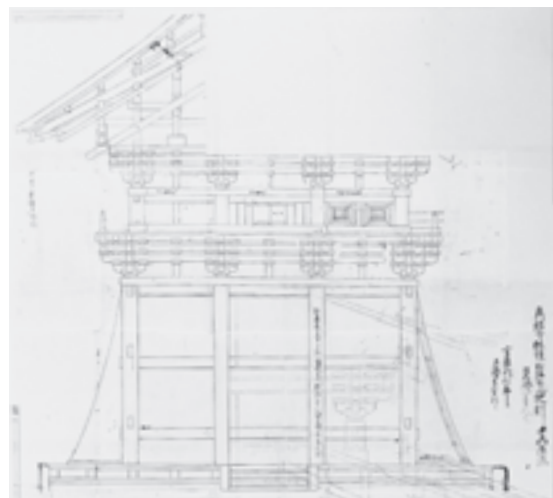
(箱崎和久)



①『鐘楼三拾歩一地割』



②『鐘楼式拾歩一地割』



③『鼓楼式拾歩一地割』

第2図 『興福寺建築諸図』(東京国立博物館蔵)

3 遺 構

(1) 調査前の地形と基本層序

調査前、経蔵と鐘楼には土壇が残っており、地表に礎石の上面が露出していた。中室大房（以下、中室と略す場合がある）には土壇はなかったが、北半では同様に礎石の上面が地表に露出していた。

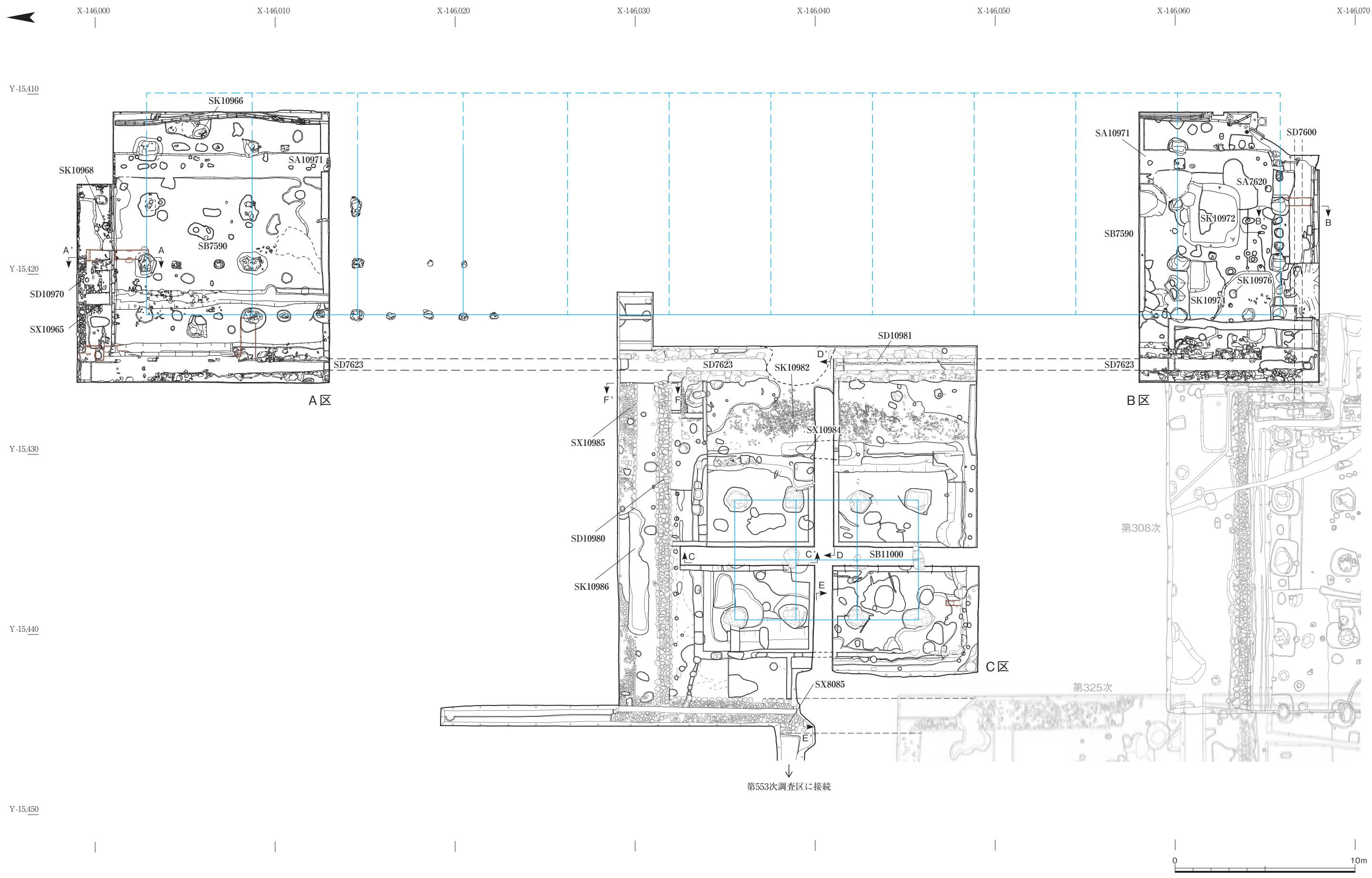
基本層序は、以下のとおりである。中室（A・B区）は、表土および近代以降の造成土が40cm程度あり、その直下が黄褐色粘質土（基壇積土）もしくは黄褐色砂礫土（基盤層）となる。遺構検出は、近代以降の造成土を除去した面でおこなった。検出面の標高は、基壇上面がA区で95.3m、B区で95.4m、基壇の北方が95.2m、西方が95.4mである。

経蔵（C区）は、土壇部分は表土および近代以降の造成土が約10cmあり、その直下が基壇土である。基壇は黄褐色砂礫土の基盤層を削り出した上に土を積んで造られており、黄褐色粘質土（創建当初の積土）の上に、部分的に明黄褐色粘質土（中・近世の積土）を確認した。遺構は近代以降の造成土を除去した面で検出し、基壇西北部では明黄褐色粘質土を掘り下げ、黄褐色粘質土上面でも検出をおこなった。土壇の周囲では、表土および近代以降の造成土が40～65cmあり、その下に近世以前の整地土を複数層確認した。その中には、焼土層が2層あった（以下、上層焼土・下層焼土と呼ぶ）。遺構検出は、近代以降の造成土を除去した面でおこない、基壇の北方と西方については、さらに上層焼土上面、下層焼土上面、基盤層上面でもおこなった。標高は、基壇土上面が96.1m、基壇周囲の近代以降の造成土を除去した面および上層焼土上面が95.5m、下層焼土上面が95.35m、基盤層上面が95.3mである。

鐘楼（D・E区）は、土壇部分は上から表土（5～10cm）、近代以降の造成土（35～50cm）、黄褐色砂礫土（基盤層）となる。遺構は黄褐色砂礫土の上面で検出した。土壇の周囲では、近代以降の造成土と黄褐色砂礫土（基盤層）との間に整地土を複数層確認した。その中には焼土層が2層あり、主に各焼土層の上面および基盤層上面で遺構を検出した。標高は、基壇土上面が95.6m、上層焼土上面が95.4m、下層焼土上面および基盤層上面が95.3mである。

(2) 中室（A・B区）の遺構

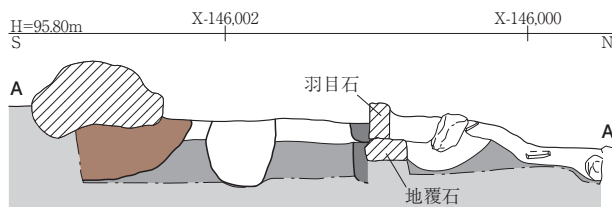
中室大房SB7590 長大な南北棟礎石建物で、桁行11間、梁行4間と推定されるが、詳細は後述する。今回の調査では、北端の桁行1間、梁行3間分（A区）と南端の桁行1間、梁行3間分（B区）について、礎石およびその据付穴や抜取穴を確認した。東の側柱と基壇縁は、現在の参道にあたるため調査できなかった。礎石は長径1m前後の安山岩で、計11基を検出した。いずれも柱座などの造り出しはない。桁行の各柱間には、長径約50cmの小型の礎石を2基ずつ配置する。南側柱筋（B区）では、各柱間に長径45～50cmの小型の石を3基ずつ配置しており、この上に木製の地覆を置いたと考えられる。このような地覆を受ける石は、西面と北面の側柱筋では確認できなかった。残存する礎石には動かされた痕跡がなく、ほとんどが創建当初の位置を保っているとみられる。建物規模は、桁行総長が約62.8m（213尺、基準尺はこれまでの調査成果に倣い1尺=0.295mとする）、柱間寸法は北端の1間が約5.9m（20尺）、南端の1間が約5.6m（19尺）。梁行は11.3m以上で、柱間寸法は西から約3.0m（10尺）、約3.2m（11尺）、約3.2m（11尺）である。桁行に配置される小型礎石の柱間寸法は、A区が各柱間の北から約1.8m（6尺）、約2.3m（8尺）、約1.8m（6尺）、B区が南から約1.8m（6尺）で他は不明である。



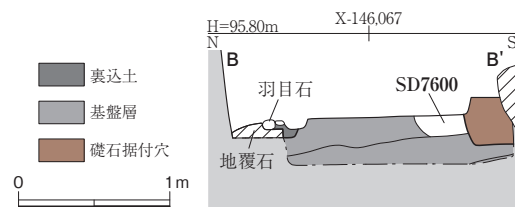
第3図 中室調査区 (A・B区)・経蔵調査区 (C区) 遺構平面図 1:200

基壇 基壇は、基盤層を削り出して造られており、A区ではその上に黄褐色粘質土の積土を確認した。基壇の規模は、南北が約66.7m（226尺）、東西が13.5m以上で、東はさらに調査区外に延びる。基壇の出は、北面と南面がそれぞれ約2.0m（6.5尺）、西面が約2.1m（7尺）、東面は不明。残存する基壇高は、北端で約30cm、南端で約25cmである。

基壇外装は、基壇の北面と南面で地覆石と羽目石を、西面北端で地覆石を確認した。北面では、基壇西北隅から東に約9.4m分、地覆石7石と羽目石10石を検出した。遺存状態は非常に良く、羽目石は上端の当初加工面まで残存していた。西面では、基壇西北隅から南に約7.0m分、地覆石7石を確認した。西北隅は直角には収まらず、西面の地覆石が北面の地覆石より約10cm北に突き出ている。さらにその北延長上にも地覆石の抜取溝があることから、北面の地覆石とT字状に接続していた時期があったとみられる。南面では、断続的ながら東西約10.3m分、地覆石8石を検出した。南面西端は後述する南北溝SD7623に壊されており、西南隅の状況はあきらかでない。地覆石内側（基壇側）の切り欠き部分には、羽目石の下端が带状に遺存している箇所も認められた。地覆石は完存するもので長さ約95cm、幅約30cm、高さ約20cm、羽目石は長さ約95cm、幅約15cm、高さ約25cmを測る。大きさは均一で、互いに仕口を施して組み合わせる。これらの外装は、二上山産の凝灰岩を用いていることや、



第4図 中室北端（A区）土層図 1：50



第5図 中室南端（B区）土層図 1：50



第6図 中室北面の基壇外装（A区、西から）



第7図 中室南面の基壇外装（B区、東から）

裏込土が精良で炭化物や遺物が混じらないことから、創建期のものである可能性が高い。後世に据え替えられたものだとしても、据付痕跡に重複がみられないことから、創建時の位置を踏襲していると考えられる。

石組溝SD7623 中室の西辺に沿って北流する石組溝。A・B・C区にまたがって検出した。幅約65cm、深さ約35cm。側石には、片麻岩を主体とする長径約80cmの自然石を用いる。1999年度の第308次調査でも検出しており、その成果をあわせると、総延長は約70mになる。A区北端で北室（北僧房）に突きあたり、西に折れる。第308次調査では享保2年（1717）の焼失後に築造されたものと理解していたが（『概報Ⅱ』、2000）、側石に風化面で割った石をそのまま用いていることや、室町時代の『春日社寺曼荼羅』に描かれていることなどから、中世の築造とみて差し支えない。埋土に含まれる遺物の年代観から、明治時代以後に廃絶したと考えられる。興福寺境内の主要な排水路の一つとみられ、中室と併存している時期は、その西面の雨落溝としても機能していた可能性がある。なお、中室西面の古代の雨落溝は、A・B区では確認できなかったが、C区で検出したSD10981（後述）がそれに該当する可能性がある。

石組溝SD10970 A区北端、中室の北方で検出した東西方向の石組溝。幅40cm以上、深さ約10cmで、約6m分を検出した。側石と底石には径15cm程度の玉石を用いる。北室南面の古代の雨落溝と考えられる。

玉石敷SX10965 SD10970の南に接する東西方向の石敷。拳大の石を敷き詰め、南側に長径20cm程度の見切りの石をならべる。幅は約75cm。長さ約3m分を検出した。なお、見切石の南に接する位置で、東西方向の凝灰岩列およびその抜取溝を検出したが、時期および性格は不明である。

土坑SK10968 A区北端、中室の北面基壇に接して検出した不整形の土坑。東西2.4m以上、南北0.5m以上、深さ約30cm。埋土に多量の瓦を含む。底部付近からほぼ完形の瓦質火鉢が出土した（第8図）。

土坑SK10966 A区の基壇上面で検出した土坑。平面は長径約90cmの楕円形を呈する。深さは約30cm。埋土に多量の炭・焼土を含む（第9図）。13世紀中頃～後半の土器が出土している。

東西溝SD7600 B区南端で検出した素掘溝。幅約30cm、深さ約15cm。第308次調査で検出した東西方向の素掘溝の延長部分にあたる。これまでに検出した総長は23.6mで、東はさらに調査区外に延びる。中室の礎石据付穴と重複し、それより古い。三条条間南小路北側溝の可能性が指摘されている（『概報Ⅱ』、2000）。

築地塀SA7620・SA10971 SA7620は、第308次調査で検出した東西方向の築地塀。明治21年（1891）



第8図 土坑SK10968瓦質火鉢出土状況（A区、北から）



第9図 土坑SK10966（A区、北から）

ごろ、奈良公園における興福寺の寺地が定められた際に設けられたものである。今回その東延長部がB区で北に折れ、A区を越えてさらに北に続くことを確認した。南北方向の築地塀をSA10971とする。SA7620の東延長部は約9.5m分検出し、第308次調査とあわせると、長さは14.7mとなる。SA10971はB区で約4.4m分、A区で約12m分を検出し、確認した総延長は64.4mとなる。いずれも両縁に大石を積んだ基底部と瓦の詰まった積土を検出した。基底部の幅は0.9m前後、掘方の幅は1.4m前後である。

その他 他にB区の基壇上面において、近世～近代の廃棄土坑を複数検出した（SK10972、SK10974、SK10976など）。いずれも埋土に多量の瓦を含む。

（3）経蔵（C区）の遺構

経蔵SB11000 桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物。礎石11基のほか、礎石の据付穴や抜取穴を検出した。礎石は長径1.0～1.6mの安山岩で、柱座などの造り出しはない。残存する礎石は、一部動かされているものもあるが、多くが創建当初の位置を保っているとみられる。建物規模は、桁行総長約10.0m（34尺）、柱間寸法は中央間が約3.5m（12尺）で、両脇間は各々約3.2m（11尺）。梁行総長は約6.5m（22尺）で、柱間寸法は約3.2m（11尺）等間である。

基壇 現存する基壇の規模は、南北約14.5m、東西約10.5m、高さ約75cm。基壇の出は、四周いずれも約2.2m（7.5尺）である。基壇は、黄褐色砂礫土の基盤層を削り出した上に土を円丘状に積んでいる。版築は確認していない。

基壇外装は、西南部と東北隅で羽目石の一部を確認した。地覆石はなく直接羽目石を立てており、裏込土に含まれる遺物の年代観から、室町時代以降に据え付けたものとみられる（第11図）。そのほかは、近代の抜取溝が残るのみである。しかしながら、古代の外装の痕跡が確認できなかったことは、創建時の位置を踏襲して再建が繰り返されたことを示すと考えられる。また、基壇北面の外装抜取溝と石組溝SD10980（後述）との間では、下層焼土の直下で、径1～3cmの礫を敷いた小砂利敷を検出した。雨落溝は検出されず、小砂利敷に雨垂れの痕跡が見られたことから、雨落溝はともなわないと考えられる。基壇の東面では、近世の階段の可能性がある高まりSX10984を確認した。東西約1.1m、南北約4.2m、高さは約20cmを測る。東面中央部分で断割調査をおこなったが、中世以前の階段は判



第10図 築地塀SA7620（奥）と築地塀SA10971（手前）（B区、北から）

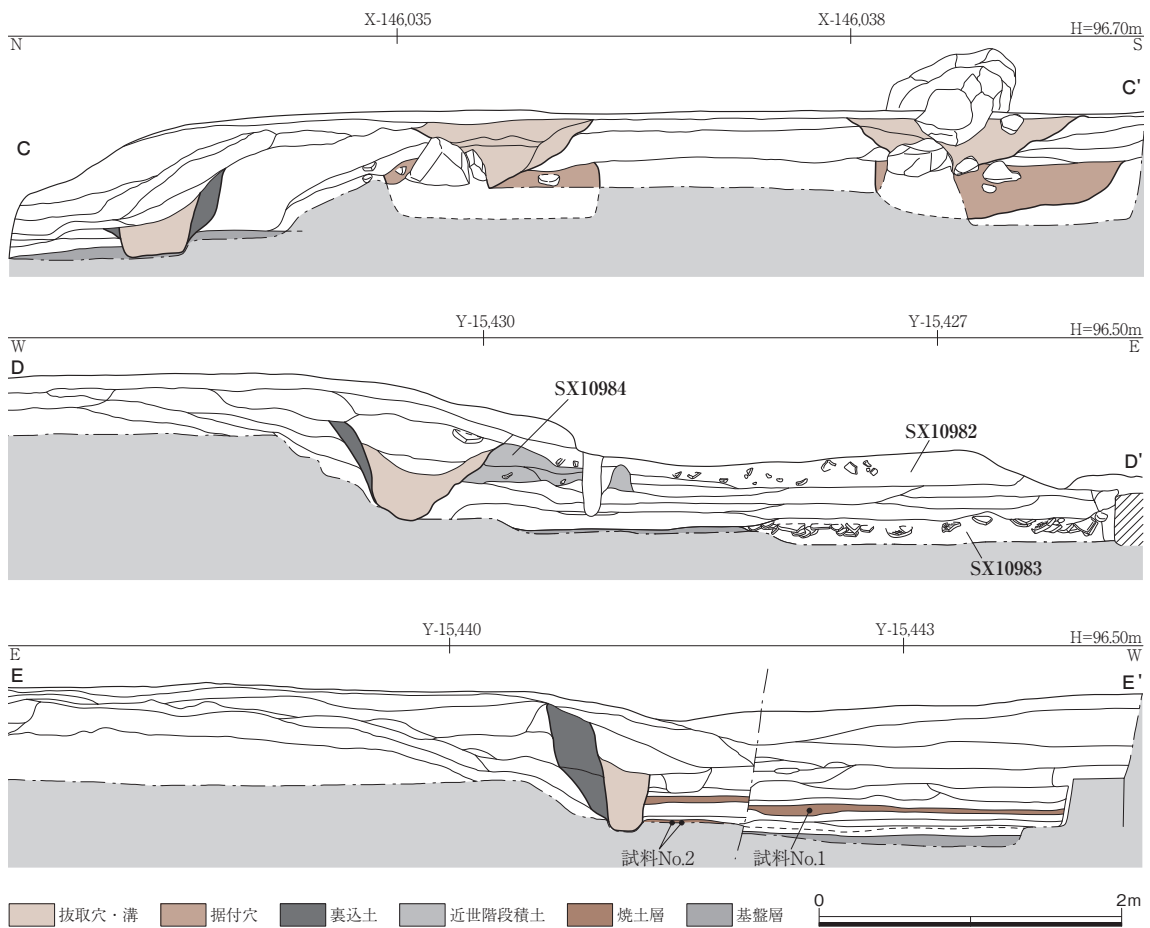


第11図 経蔵SB11000西南部の基壇外装と抜取溝（C区、南西から）

然としなかった。他に、基壇の北・西・南で建設時もしくは解体時の足場穴とみられる小穴列を検出している。小穴は平面が径20～25cmの円形を呈する。上層焼土の上から掘り込まれるが、詳しい時期は不明である。

瓦溜SX10982 基壇の東面に沿って、東西約2m、南北約12mの範囲に帯状に広がる（第13図）。瓦の年代は近世が主体で、享保2年（1717）の火災後の片付けにともなって廃棄されたものと考えられる。

瓦溜SX10983 基壇の東面、瓦溜SX10982の下層で検出した。上層の瓦溜SX10982を一部掘り下げ、



第12図 経蔵（C区）土層図 1：50



第13図 瓦溜SX10982（C区、北東から）



第14図 瓦溜SX10983（C区、南から）

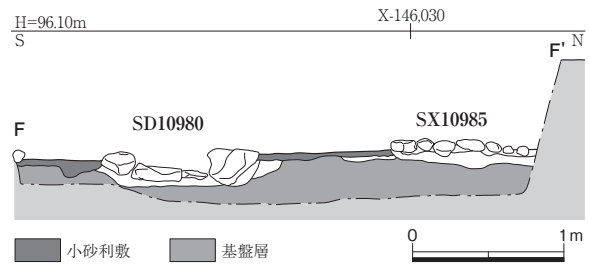
東西2.0m以上、南北2.6m以上の範囲に広がることを確認した（第14図）。奈良時代の瓦が主体で、古代の焼失にともなう瓦溜であろう。

石組溝SD10980 経蔵の北方で検出した東西方向の石組溝。側石と底石に径25cm程度の玉石を用いている。幅約50cm、深さ約10cmで、

長さ約19m分を検出した。西はさらに調査区外に延びる。東は中室西辺の石組溝SD7623に壊されているが、元来は中室西面の雨落溝に接続していたとみられる。鐘樓の北方でも、伽藍中軸線を挟んでほぼ東西対称の位置で、同様の石組溝SD10990を検出している（後述）。これらは基盤層直上に据え付けられており、創建期に遡る可能性が高い。講堂周辺の排水溝の可能性が考えられる。

玉石敷SX10985 石組溝SD10980の北方で検出した東西方向の石敷。拳大の玉石を敷き詰めており、南面をそろえて長径20～30cmの見切りの石をならべている。幅は1.3m以上で、長さ約19m分を検出した。土坑SK10986と重複し、それより古い。鐘樓の北方でも、伽藍中軸線を挟んでほぼ東西対称の位置で、玉石敷SX10995を検出している（後述）。

玉石敷SX8085 経蔵の西方で検出した南北方向の石敷。拳大の玉石を敷き詰め、東西両側に長径25cm程度の見切りの石をならべている。幅は約2mで、長さ約9m分を検出した。石組溝SD10980を挟んでその北にも延び、玉石敷SX10985に接続する。2001年度の第325次調査において中金堂の東方で検出した玉石敷（『概報Ⅲ』、2002）の北延長部にあたり、総延長は約28mになる。なお第553次調査では、鐘樓の東方で南北方向の見切石をもつ石敷を東西幅約1.2mにわたって確認しており、中金堂と鐘樓の間にも同様の石敷が展開していたものと想定される（桑田訓也ほか「興福寺境内の調査—第553次・



第15図 C区SD10980・SX10985土層図 1:50



第16図 石組溝SD10980（C区、東から）



第17図 石組溝SD7623と南北溝SD10981（C区、北から）

第559次』『奈文研紀要2016』)。1975年の調査において、中金堂・講堂と鐘楼との間で検出した石敷も(『防災報告』)、一連の遺構の可能性がある。

土坑SK10986 石組溝SD10980の北で検出した不整形の土坑。東西5.2m以上、南北1.4m以上、深さ約25cm。鎌倉時代の土器がまとまって出土した。玉石敷SX10985と重複し、それより新しい。

南北溝SD10981 C区南半、石組溝SD7623の底で長さ7.7m分を検出した。幅30cm以上、深さ約10cm。西肩に拳大の石を据えて側石とする。底石は確認していない(第17図)。古代における中室の西雨落溝の可能性はある。

(4) 鐘楼(D・E区)の遺構

鐘楼SB11010 礎石は、西北隅の1基を確認した。長径約1.3mの安山岩で、柱座などの造り出しはない。東南隅では、想定位置で礎石やその据付穴・抜取穴を確認できず、削平されたとみられる。地表には他に8基の礎石が露出しており、その測量成果によると、鐘楼は桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物で、桁行は全長約10.0m(34尺)。柱間寸法は中央間が約3.5m(12尺)で両脇間は約3.2m(11尺)。梁行は全長約7.1m(24尺)で、柱間寸法は西が約3.2m(11尺)、東が約3.8m(13尺)となる。梁行が等間にならない点についての解釈は後述する。

基壇 西北隅(D区)と東南隅(E区)を確認した。基壇の規模は、東西約10.9m(37尺)、南北約14.5m(49尺)。基壇の出は、北面と西面が約2.2m(7.5尺)、東面と南面は不明である。基壇は大きく削平を受けており、現存の土壇には近代以降の造成土が35~50cmと厚く盛られていた。現存する基壇の高さは、西北部で35~40cm、東南部で約30cmである。基壇は黄褐色砂礫土の基盤層を削り出して造られており、西北部では裾の一部でいぶい黄褐色粘質土の積土を確認した。

基壇外装は、一部で凝灰岩製の羽目石を確認した。経蔵の外装と同様、地覆石はなく直接羽目石を立てている。

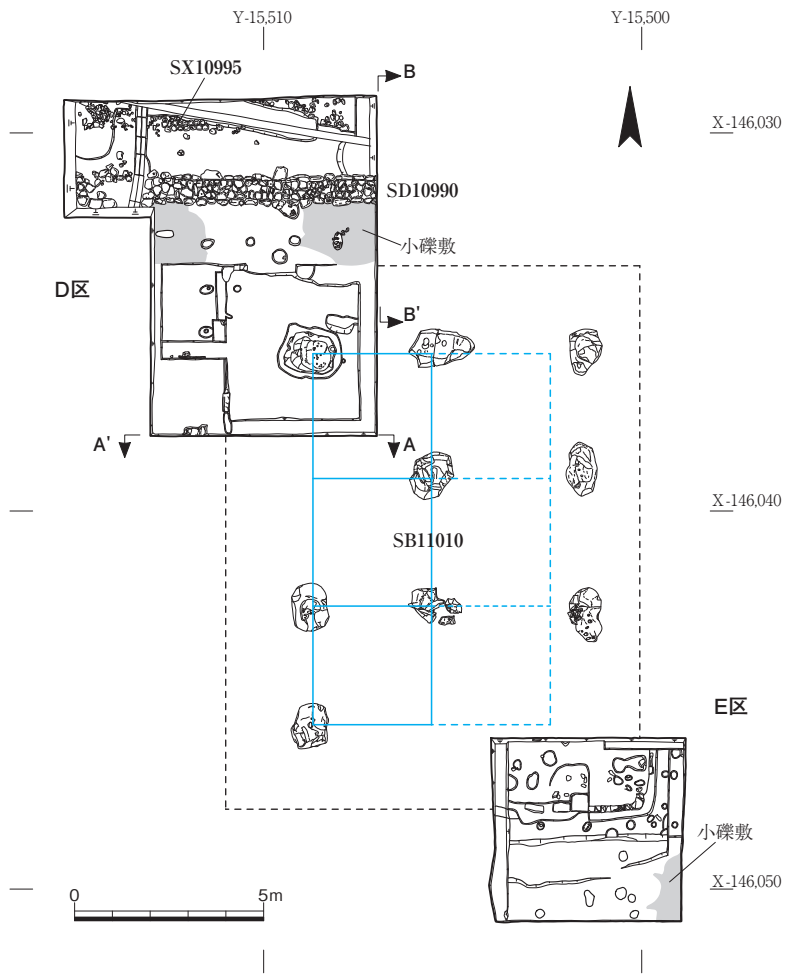
このほか、基壇の周囲で、建設時もしくは解体時の足場穴とみられる小穴列が見ついている。小穴は平面が径20~40cmの円形を呈する。上層焼土の上から掘り込まれるが、詳しい時期は不明である。また、基壇の北面および南東では、基盤層の直上で小礫敷を確認した。基盤層に含まれる礫を利用しつつ、さらに径1~3cmの礫を人為的に敷いているとみられる。創建期に遡る遺構の可能性はある。D区東壁の土層断面の観察結果によると、小礫敷の直上を下層焼土が覆う。

石組溝SD10990 鐘楼の北方で検出した東西方向の石組溝。側石と底石に長径30cm程度の玉石を用いている。幅約50cm、深さ約10cmで、長さ約8m分を検出した。東西はさらに調査区外に延びる。底石上面の標高は、西に向かって低くなる。経蔵の北方で検出した石組溝SD10980と、伽藍中軸線を挟んで東西対称の位置にある。

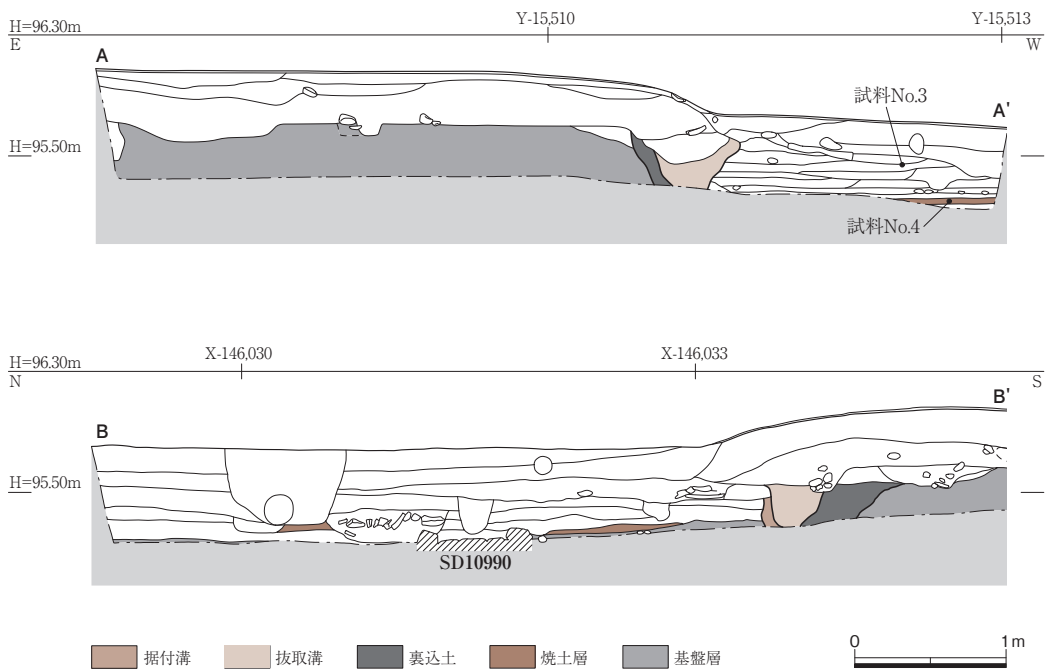


第18図 鐘楼東南部(E区)全景(南西から)

玉石敷SX10995 石組溝SD10990の北方で検出した石敷。拳大の玉石を敷き詰めている。幅1.3m以上、長さ約5.5m分を検出した。経蔵の北方で検出した玉石敷SX10985と、伽藍中軸線を挟んで東西対称の位置にある。(桑田)



第19図 鐘楼調査区 (D・E区) 遺構平面図 1 : 200



第20図 鐘楼調査区 (D区) 土層図 1 : 50

4 出土遺物

(1) 瓦磚類

今回の調査では古代から近代までの多くの瓦磚類が出土した(第3～5表)。軒瓦の出土量としては中・近世のものをもっとも多く、次に平安時代、奈良時代と続く。軒瓦の出土量としては少ないが、時期ごとに見ると型式にまとまりを欠き、建物ごとの所用瓦や軒瓦の変遷等について、傾向を見出すことは難しい。以下、出土地区ごとに特徴的な軒瓦について述べる。

中室出土瓦 本調査では中室の北端(A区)と南端(B区)に調査区を設けているが、第21図のうち、1～7がA区から出土し、8～17がB区から出土した。そのうち、1～4・8～11が軒丸瓦、5～7・12～17が軒平瓦である。

1は興福寺の創建瓦である6301Aで、築地塀SA10971から出土。2は藤原宮式軒瓦の6271A。6271Aは平城宮およびその周辺では2点しか出土していないが、興福寺旧境内からは6点が出土している。石組溝SD10970から出土。3は東大寺式軒瓦の6235Jで、興福寺旧境内からの出土が顕著である。現代の遺物を含む土坑より出土した。4は平安時代の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、石組溝SD7623から出土した。西室からも出土している。5は興福寺の創建瓦である6671A。6は6682Dで天平年間の所産。興福寺旧境内の各所から出土しているが、北円堂院からの出土が多い。7は「興福寺」銘をもつ軒平瓦で、鎌倉時代に属する。食堂などからも出土している。

8は平安時代の単弁8弁軒丸瓦で、外区に内縁に「×」文を施す。土坑SK10976から出土。9は平安時代末頃の二巴文で、石組溝SD7623から出土。10が中世の巴文で、11が近世の巴文。ともに

第3表 中室調査区(A・B区)出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数			
6235	J	1	6561	A	1	軒棧瓦	1	
6271	A	2	6645	A	2	丸瓦(刻印)	13	
6271	?	1	6671	A	6	丸瓦(ヘラ書)	4	
6301	A	5	6671	L	3	平瓦(刻印)	12	
6311	?	1	6671	?	1	平瓦(ヘラ書)	3	
型式不明(奈良)		2	6682	D	1	鬼瓦(中世)	2	
巴(平安)		1	6682	G	1	鬘斗瓦	19	
平安		12	6732	G	1	鬘斗瓦(ヘラ書)	1	
古代		12	6739	A	2	面戸瓦	2	
巴(鎌倉)		1	型式不明(奈良)		1	伏間瓦	15	
鎌倉		2	平安		21	伏間瓦(刻印)	3	
巴(室町)		2	古代		9	鳥衾	2	
巴(中世)		8	鎌倉		21	目板瓦	5	
中世		20	室町		7	雁振瓦	2	
巴(近世)		3	中世		11	輪違い	1	
近世		21	近世		10	袖丸瓦	1	
近代		3	時代不明		1	掛け瓦?	1	
時代不明		10				水波文磚(緑釉)	1	
						特殊磚	1	
						隅木蓋	1	
						道具瓦(用途不明)	4	
						瓦製円盤	2	
						レンガ	1	
						凝灰岩	51	
軒丸瓦計		107	軒平瓦計		99	その他計		147
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩	レンガ	
重量	608.958kg		1452.693kg		0.257kg	147.969kg	0.74kg	
点数	3667		11283		2	137	2	

SK10976から出土した。12は奈良時代初頭の6561A。主に平城宮から出土するが、興福寺や薬師寺からも出土している。今回は土坑SK10972から出土した。13は藤原宮式軒平瓦の6645Aで、築地塀SA7620から出土。平城京内では1点を除くと、すべて興福寺旧境内から出土している(11点)。14は6671Lで、養老5年(721)～天平17年(745)ごろのものか。平城京内では興福寺旧境内からのみ出土する。SA7620から出土した。15は東大寺式軒平瓦の6732Gで、SD7623から出土。東大寺からの搬入品と考えられる。16は水波文を主体とすることから、室町時代のものか。土坑SK10974から出土。このほか、中金堂院や南大門からも出土している。17は近世の所産で、左右両端に引っかけをもつ。

経蔵出土瓦 遺構からの出土例は少な



第21図 中室調査区 (A・B区)・経蔵調査区 (C区) 出土軒瓦 1 : 4

く、多くが遺物包含層からの出土である。18～20が軒丸瓦で、21～23が軒平瓦である。18・19は平安時代の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、18は弁端が異様に広い点の特徴である。20は大きく「興」銘が記された軒丸瓦で、食堂などからも出土しており、鎌倉時代の所産である。21は6739Aで神護景雲年間

第4表 経蔵調査区（C区）出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数			
6301	A	1	6739	A	1	丸瓦（刻印）	3	
6301	I	1	古代		5	丸瓦（ヘラ書）	1	
薬師寺86		1	平安		3	平瓦（刻印）	26	
平安		5	平安後期		1	平瓦（ヘラ書）	1	
古代		6	鎌倉		5	鬼瓦	4	
巴（鎌倉）		1	室町		7	鬘斗瓦	6	
鎌倉		2	中世		9	箱鬘斗瓦	5	
巴（室町）		1	法隆寺277A		1	面戸瓦	1	
室町		1	近世		6	蟹面戸瓦	5	
菊丸		1	時代不明		5	鳥衾	2	
巴（中世）		17				目板瓦	2	
中世		11				雁振瓦	2	
巴（近世）		13				飾瓦	2	
近世		9				道具瓦（用途不明）	5	
巴（時期不明）		2				瓦製品（用途不明）	1	
時代不明		12				土管	1	
						凝灰岩	19	
軒丸瓦計		84	軒平瓦計		43	その他計		86
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩	レンガ	
重量	299.276kg		633.916kg		0	58.995kg	0.136kg	
点数	2569		7028		0	116	1	

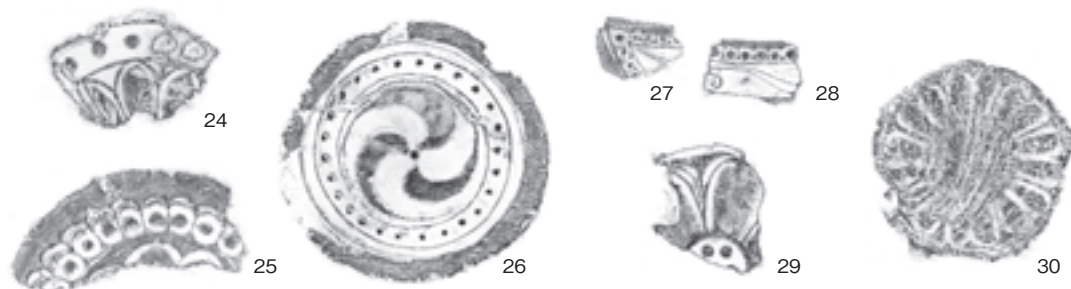
第5表 鐘楼調査区（D・E区）出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数			
法隆寺22A?		1	古代		2	丸瓦（刻印）	2	
古代		1	平安		10	平瓦（刻印）	3	
巴（平安）		1	鎌倉		3	平瓦（ヘラ書）	1	
平安		9	近世		2	割鬘斗瓦（中世）	1	
巴（鎌倉）		1	時代不明		5	面戸瓦	9	
鎌倉		2				蟹面戸瓦（古代）	2	
巴（中世）		3				鳥衾（中世）	1	
中世		3				道具瓦（用途不明）	5	
巴（近世）		1				土管	1	
巴（時期不明）		1				凝灰岩	7	
時代不明		13						
軒丸瓦計		36	軒平瓦計		22	その他計		32
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩	レンガ	
重量	127.643kg		305.937kg		0	51.784kg	0	
点数	1067		3625		0	171	0	

(767～770)に属する。西隆寺所用瓦でもある。22は唐草文を主文様とする平安時代のもの。23は蓮華文系の中心飾りをもち、17世紀後半のものと考えられる。法隆寺において同范品の使用が確認されている(277A型式)。

鐘楼出土瓦 鐘楼では西北隅（D区）と東南隅（E区）に調査区を設けている。24～28がD区から出土し、29・30はE区からの出土である。24～26・29・30が軒丸瓦であり、27・28が軒平瓦である。24は平安時代の単弁蓮華文。25は平安時代の複弁蓮華文で、薬師寺に類例が認められる。26は中世の巴文で、巴の中心に珠点をもつ。27・28は同一個体ではないが、同一型式と考えられる。平安時代のもので、珠点の施文方法に特徴がある。なお、26～28はD区西北隅から出土した。

29は破片ではあるが、法隆寺における22A型式（法隆寺昭和資財帳編集委員会『昭和資財帳15 法隆寺の至宝 瓦』小学館、1992）と同范の可能性が高く、その場合、7世紀後半に遡る可能性がある。30も平安時代のものだが、瓦当面に糸切り痕が明瞭に残っており、粘土から切り出した瓦当面に瓦範を押しつけている状況が確認できる。（林正憲）



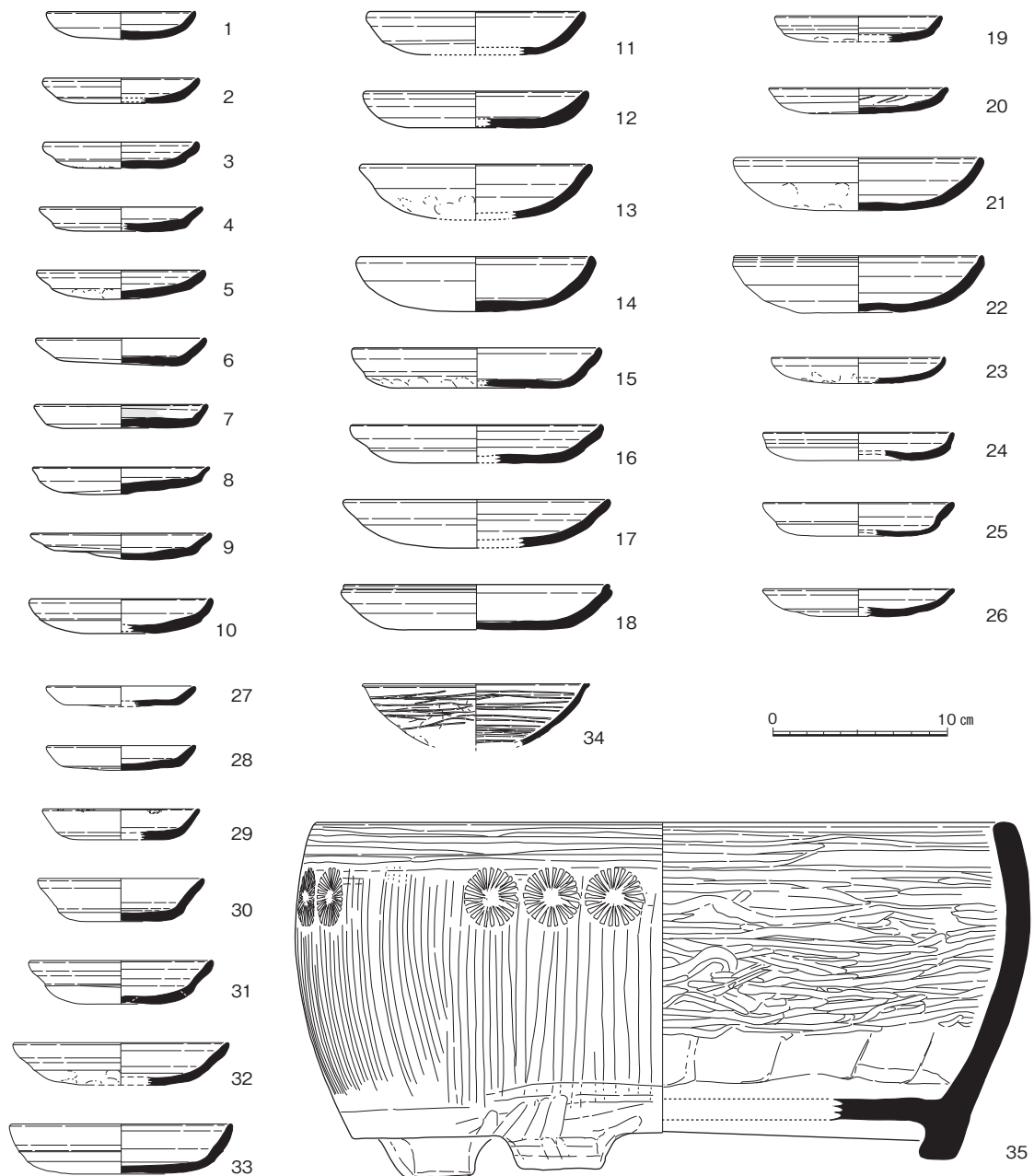
第22図 鐘楼調査区（D・E区）出土軒瓦 1：4

(2) 土 器

奈良時代から近代にいたる土器、土製品、陶磁器が、整理箱で20箱分出土した。古代の土器は少なく、鎌倉時代以降のものが主体的である。

第23図-1～18は、C区の土坑SK10986出土。口径8～11cmの小皿（1～10）と12～13cmの中皿（11～14）、14～16cmの大皿（15～18）からなる。

小皿は上段のナデが形骸化しているが、中大皿は2段のナデを施すものが主体的である。これら皿の口径分布と調整技法は、興福寺一乗院の調査で検出した土器堆積層SX8200中層・下層出土土器（次山淳ほか「興福寺一乗院跡の調査—第328次」『奈文研紀要2002』）と近似しており、12世紀後半頃と推定で



第23図 中室・経蔵・鐘楼出土土器 1：4

きる。

19～22はA区中室大房SB7590の基壇上で検出した小穴から出土。口径9～11cmの小皿（19・20）と14～15cmの大皿（21・22）がある。小皿、大皿ともに2段ナデが主体的であるものの、口縁端部は外反するものではなく直立する特徴は、旧大乘院庭園で見つかった土坑SK8982出土品（高橋克壽ほか「旧大乘院庭園の調査―第390次」『奈文研紀要2006』）と似ており、12世紀前半に位置付けられよう。

23～26はB区中室大房SB7590の南側柱列付近の遺物包含層から出土した土師器皿。口径9～11cmで、いずれも口縁部外周に1段ナデを施す。口径と調整技法から13世紀中頃～14世紀前半頃のものともみられる。

27～34はA区の土坑SK10966から出土。27～29は口径9cm前後の浅手の小皿。30・31は平底から直線的に口縁部が立ち上がり、やや器高も高い。32・33は口径11～12cmの大皿。器高が高い一群があることや、口縁端部の形態は、旧大乘院庭園で見つかった土器溜りSX8829（大林潤ほか「旧大乘院庭園の調査―第374次」『奈文研紀要2005』）の土器に近似することから、13世紀中頃から後半に位置付けられよう。34は瓦器椀だが、高台を欠くが口縁部の特徴などから、川越編年（川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢Ⅲ』奈文研、1983年）の第Ⅲ段階C型式に比定でき、土師器皿の年代と整合的である。

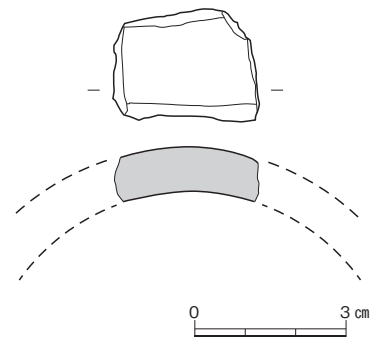
35はA区中室大房SB7590の北面基壇外側で見つかった瓦質土器の円形火鉢。ほぼ完形に近い状態で廃棄されていたが、底部を欠く。口径40cmに対し、器高が17cm（脚部を含めると19.5cm）とやや高い。体部外面を縦方向に丁寧に磨き、口縁端部付近は横方向に磨きを加え、菊花文の押印を施す。押印は、割付が不均等で、3個連続のところと2個連続の部分がある。内面は、下部で板状工具のナデが残るが、口縁部から3分の2程度は、粗いものの横方向の磨きが加えられる。器形、調整から、瓦質火鉢の中でも、やや古相の様相を呈するとみられ、14世紀頃のものであろう。（神野 恵）

（3）金属製品

銅製品 風鐸片、円環状金具、細板状金具、キセル雁首がそれぞれ1点ずつ出土した。第25図は、風鐸片。厚さ約1.2cmの鋳造品と考えられ、内外面は平滑である。四辺は欠損するが横断面形は弧状



第24図 A区（中室北側）出土瓦質円形火鉢



第25図 C区出土風鐸片 2：3

をなしており、復元外径は約10.0cm、内径は約8.7cmで、小型風鐸の可能性ある。C区北部の遺物包含層出土。円環状金具は径約2cm、厚さ0.2cmの小型品。C区経蔵SB11000の基壇外装抜取溝出土。細板状金具は長さ12.7cmで、一端が尖り他端が刺叉状をなすもの。A区表土出土。キセル雁首はD区の遺物包含層出土。

鉄製品 角釘19点、丸釘3点、鋸4点、座金具1点、環状金具1点、U字形金具5点などが出土した。角釘は大半が小片だが頭部形状が判別できるものに折釘、頭巻釘が1点ずつある。これらはC区経蔵SB11000の基壇外装裏込土、B区の築地塀SA10971掘方、C区の瓦溜SX10982、A区中室大房SB7590やC区経蔵SB11000周辺の遺物包含層などから出土した。鉄鋸は、D区鐘楼SB11010の基壇西面の上層焼土を掘り込む小穴、D区の遺物包含層などから出土した。

(4) 冶金関連遺物

鋳型片2点、羽口片2点、銅滓片1点が出土した。鋳型片は2点とも真土の表面が被熱により黒色化しており、表面は弧状を呈する(第26図)。B区の土坑SK10972より出土。羽口片は、復元外径がそれぞれ8.3cm、7.2cmで表面は被熱により黒色あるいは灰色化する(第26図)。B区南部の築地塀SA10971掘方出土。銅滓片はA区北部の遺物包含層出土。

(5) 植物遺存体

C区土坑SK10986の炭層から炭化植物遺体が出土した。土坑中より採取した500mlの土壤中から1mm目の篩で回収した植物種実は、炭化米208点(破片148点)(第27図)、炭化アワ1点、不明炭化種子1点である。炭化米はすべて胚が欠けており断面形は丸みをもつ。炭化米を無作為に50点抽出した計測値は、長 4.34 ± 0.30 、幅 2.48 ± 0.15 、厚 1.75 ± 0.15 であり、粒型(長/幅) 1.75 ± 0.14 で短中粒、大きさ(長×幅) 10.79 ± 1.09 で小型に分類できる(粒型と大きさの基準は、松本豪「日本の稲作遺跡と古代米に関する研究」『大阪府立大学紀要』vol.46、1994年、135-194頁による)。(芝 康次郎)



第26図 B区出土冶金関連遺物



第27図 C区土坑10986出土炭化米 10:1

5 地中レーダー（GPR）による探査成果

はじめに 地中に埋没している遺構の状況を確認する代表的な手法として発掘調査があげられる。遺構の詳細を直接確認できる点で優れている反面、直接土壌を除去するため大きく周辺環境を改変する問題もある。このため、補助的な手段として非破壊による地中の情報取得手段が開発されてきた。この一連の手法を遺跡探査と総称する。

今回は、興福寺中室・経蔵周辺の発掘調査区周辺の未発掘地の状況、中でも中室の柱配置についての知見を得ることを主な目的として地中レーダー（Ground Penetrating Radar：以下GPRと略）による探査を実施した。以下に手法と成果について報告をおこなう。

探査方法 GPRは電磁波を用いて迅速に地中の異常部の状況を高密度に取得できる手段である。また、アンテナの中心周波数を変えることにより、浅い部分を高解像度に探査することから、やや解像力は劣るものの深い部分を探査することまで対象に応じた仕様が可能であり、遺跡においても遺構の詳細な情報の取得に効果をあげつつある。

今回の使用機器は、GPRシステムはGSSI社製SIR-3000、アンテナは400MHz（model5103）を用いた。

探査区は東西16m、南北43mの範囲で、経蔵の発掘調査区（C区）部分を除いている。測線方向は南北、間隔は0.5mでおこなった。結果は断面情報として取得される。取得データはGPR-Slice7.0（Dean Goodman氏作成）を用いてTime-Slice法（Goodman D., Nishimura Y., and Rogers J. D. 1995 GPR Time-Slices in Archaeological Prospection. *Archaeological Prospection* 2:85-89.）による深さごとの平面の状況を表示し、形状による考古学的な検討をおこなった。発掘調査の所見より、深部に遺構はないと考え、深さは70nsまでとした。深さは時間（ns：ナノ秒）で示す。探査区は北側に整備土がすでに入っている状態であり、探査結果に大きく影響するものとする。

探査成果 探査成果の断面Profile表示（第28図）、平面Time-Slice表示（第29図）をそれぞれ示し、成果について述べる。

1) 断面Profileの成果

断面Profileによる成果（第28図）では、 $X = 2 \sim 6$ m付近の10～50nsの部分に強い反射が存在する。これらは後述の平面での確認および北側調査区（A区）の成果より、中室西面の中世以降の雨落溝である石組溝SD7623と考える。

中室の柱筋に近い $X = 6.5, 9.5, 13, 16$ mの各測線から、深さ10～20nsの位置に複数の反射を観察することが可能である。これらの多くは石などの反射と考えることができる。

調査区北側中央部分 $X = 10 \sim 13$ m、 $Y = 35 \sim 39$ m付近には明瞭な反射が存在する。反射は上部の状況に影響されることが多く、実際の深さは慎重に検討する必要があるが、10nsより60ns程度まで存在するように見える。土中に瓦礫を多く含む土坑あるいは井戸の可能性が高い。

2) 平面の成果

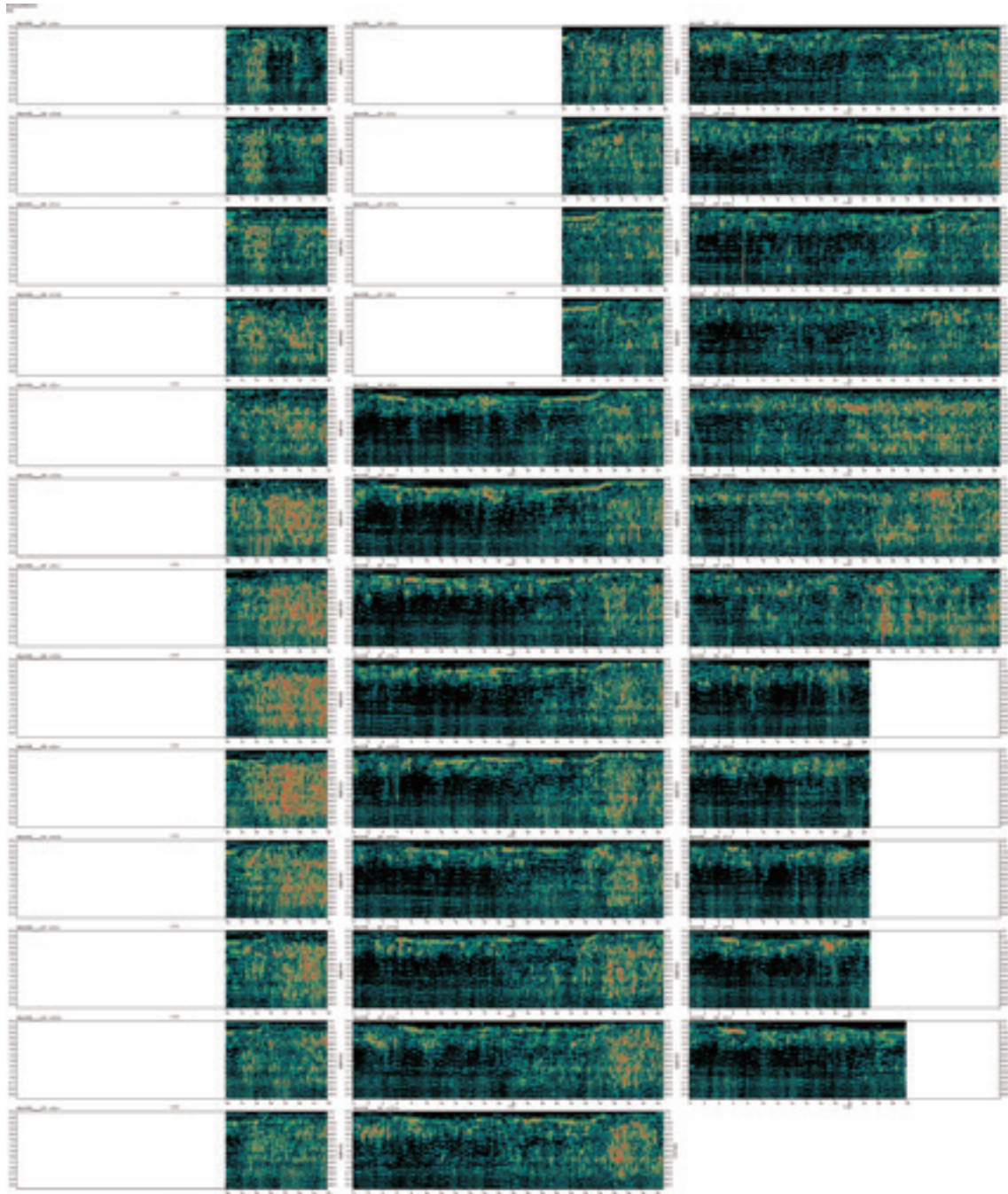
Time-Slice法により、4.7nsごとの深さを表示し、検討をおこなう（第29図）。上層部は探査区北部で盛土の影響や埋設管と考えられる斜め方向の線状の反射（ $Y = -146.042 \sim -146.022$ ）が存在する。表土下の11ns以下に主要な遺構が存在すると思われるが、上層の影響も強く、規模の大きい明瞭な遺構以外は平面のみで判断することは難しい。

北側の発掘調査区（A区）で確認されている中室西面の中世以降の雨落溝にあたる石組溝SD7623

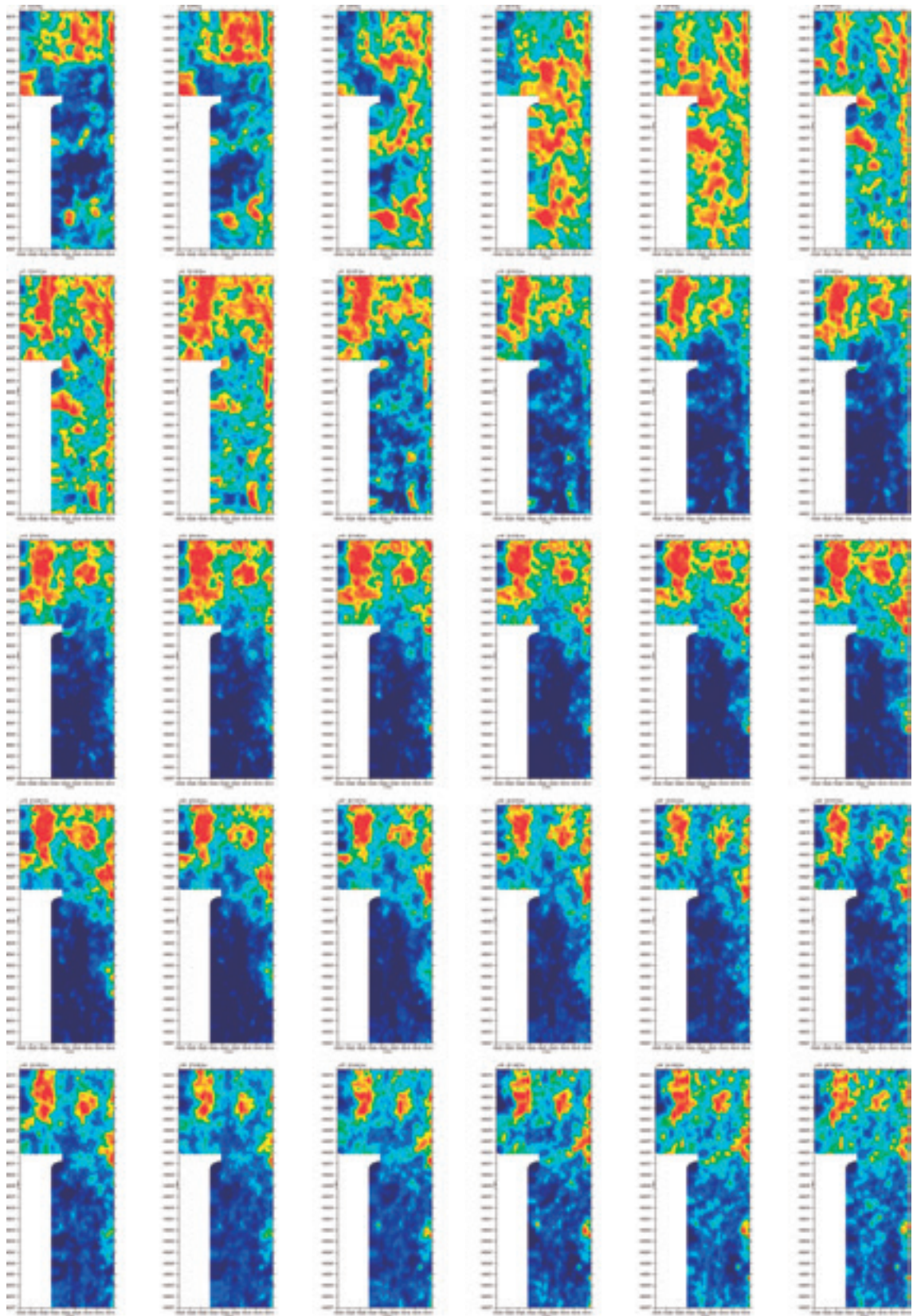
は、北辺で $Y = -15,424 \sim -15,426$ に明瞭に確認でき、直線的に南下し、強い反射は $X = -146,023 \sim -146,025$ で西に直角に曲がる。溝状の遺構の存在する可能性が高い。やや弱い反射はそのまま南下しており、経蔵東方の石組溝SD7623に繋がると考える。

探査区東端の $Y = -15,414$ 付近では、南北に線上に延びる反射が存在し、これは発掘調査で確認されている築地塀SA10971に対応すると考える。

本探査の主な目的のひとつである柱穴については、 $Y = -15,416$ 、 $-15,419$ 、 $-15,422$ で、それぞれ南北方向に点状に存在する点状の反射が候補となる。中でも $-15,416$ の筋は強い反射を示すものがあり、礎石が残存している可能性がある。 $-15,419$ の筋は反射が弱くかつ小範囲であるものの、等間隔



第28図 興福寺中室地区GPR-Profile 断面図



第29図 興福寺中室地区GPR平面図

に並ぶことから礎石の痕跡か、小型の礎石が残存している可能性がある。Y = -15,422の筋では、X = -146,037、-146,051に強い点状の反射があり、これらも礎石の可能性はある。やや軸から外れるものもあり、石材や抜取痕跡の存在の可能性を提示できるが、時期や性格は不明なものも多い。

調査区北側中央部分 X = -146,017 ~ -146,021、Y = -15,416 ~ -15,420付近で断面で指摘できる反射は、平面円形を呈しており、断面Profileにおける所見と同様に土坑あるいは井戸である可能性がある。この周辺は上部に方形の反射が広がっており瓦礫や砂利などが面的に存在していると考えられる。ちょうど円形の反射が明瞭になる面と近く、中央の土坑と関係するか、円形の土坑の埋没後、削平された後に敷かれたものと考えられることができる。

おわりに　今回は調査時間の不足もあり、暫定的な成果を得ることしかできなかったが、未発掘地の地下の状況についていくつかの所見を得ることができた。柱穴については、その可能性のある痕跡を指摘できるものの、その当否については今後の探査や発掘による検証が必要と考える。（金田明大）

6 放射性炭素年代測定

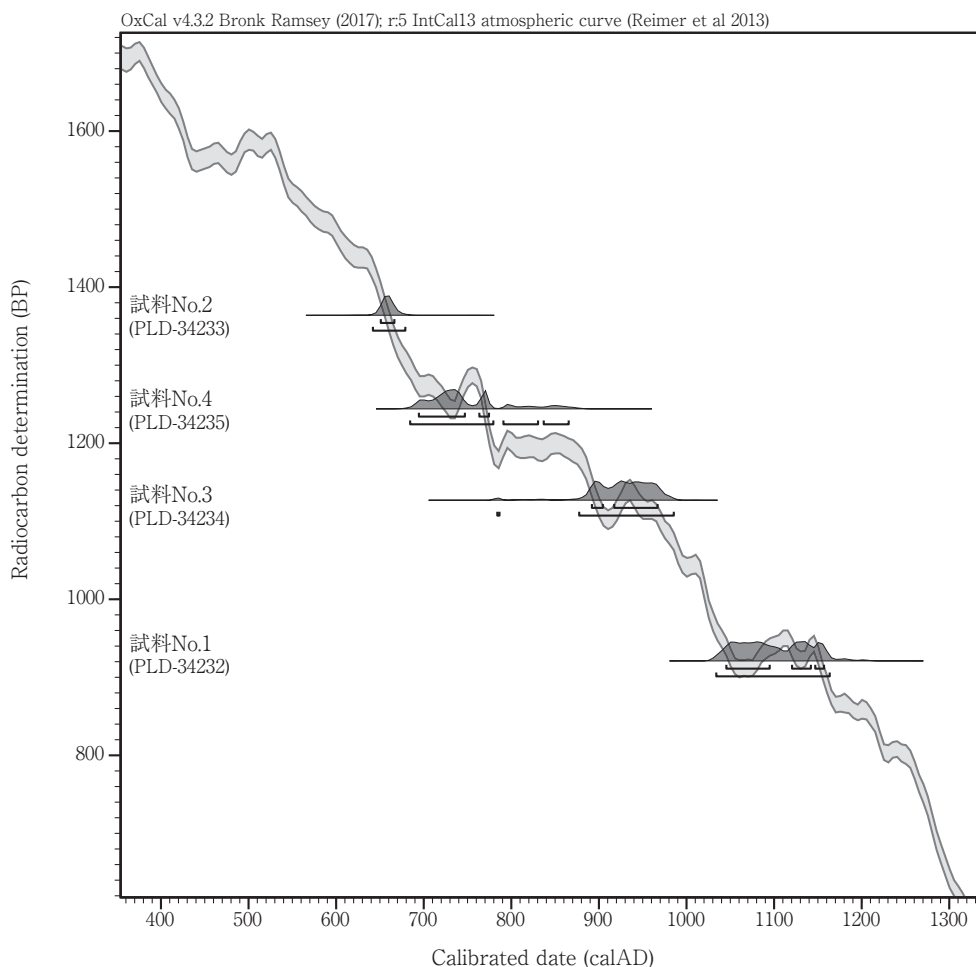
はじめに　興福寺はその歴史の中で幾度も火災被害に遭っており、中室、経蔵、鐘楼とも焼失と再建を繰り返していることが史料から読み取れる（第2表、5頁）。今回の調査では、焼土や中世の整地土と考えられる堆積物中に炭化材の挟在がみられ、経蔵と鐘楼の周囲で各2面、合計4面の焼土層を検出した。出土した炭化材は、そのような被災記録を反映する物証である可能性があるが、その位置は中金堂・講堂を挟んで約70m離れており、相互の関係を層序から位置付けることは困難であった。そのため、経蔵と鐘楼の焼土層の同時期性、さらには火災による焼失を実証するために、どのような出土遺物や調査方法が有効であるか、あるいはどのような課題が存在するかを探るための基礎データを得ることを目的として、各層から採取した炭化材4点について放射性炭素年代を測定した。

試料と方法　試料は、C区東西畦北壁の経蔵基壇外装抜取溝西側でみられる上層焼土中の炭化材（試料No.1）、下層焼土中の炭化材（試料No.2）（第12図、14頁）、さらにD区南壁の鐘楼基壇外装抜取溝西側でみられる中世の整地土と考えられる堆積層直上を薄く被覆する炭層の炭化材（試料No.3）と、下層焼土中の炭化材（試料No.4）（第20図、17頁）を選択した。いずれの試料も火による燃焼経歴をもつ材料片であり、最終形成年輪は残っていなかった。試料は超音波洗浄後、アセトンによる有機溶剤処理、酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）による前処理をおこなった試料からグラファイト試料を作成し、加速器質量分析計（NEC製コンパクトAMS1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度については、同位体分別効果の補正をおこなった後、¹⁴C年代および暦年代を算出した。試料の調整・測定は、いずれも株式会社パレオ・ラボに委託した。

結果　試料名に測定番号を付記した測定結果を第6表に示す。また第30図に暦年校正曲線上に年代測定値を入れたグラフを示した。年代測定値は、AD1950年を基点にして何年前かを示した年代であり、¹⁴C年代（yrBP）の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用している。第6表の各項については、以下の通りである。層には試料の採取層を記載した。 $\delta^{13}\text{C}$ は、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比を示す。暦年校正用年代は、測定値について同位体分別効果の補正をおこなった値であり、年代範囲も含め暦年校正に用いている。この年代値は下1桁を丸めていない値であり、暦年校正曲線

第6表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	層	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
試料No.1 (PLD-34232)	上層焼土	-25.15 \pm 0.23	921 \pm 23	920 \pm 25	1045-1095 cal AD (41.9%)	1034-1163 cal AD (95.4%)
					1120-1142 cal AD (18.3%)	
					1147-1157 cal AD (8.1%)	
試料No.2 (PLD-34233)	下層焼土	-26.13 \pm 0.13	1364 \pm 20	1365 \pm 20	651-666 cal AD (68.2%)	642-679 cal AD (95.4%)
試料No.3 (PLD-34234)	炭層	-25.65 \pm 0.13	1127 \pm 22	1125 \pm 20	892-904 cal AD (13.6%)	784-786 cal AD (0.3%)
					917-967 cal AD (54.6%)	877-985 cal AD (95.1%)
試料No.4 (PLD-34235)	下層焼土	-29.17 \pm 0.18	1244 \pm 20	1245 \pm 20	694-747 cal AD (56.5%)	684-779 cal AD (80.5%)
					763-774 cal AD (11.7%)	791-830 cal AD (8.6%) 837-865 cal AD (6.3%)



第30図 暦年較正曲線と放射性炭素年代測定の結果

が更新された際にはこの値を用いて再較正をおこなうことが可能である。一方、 ^{14}C 年代は、暦年較正用年代について慣用に従い、年代値と誤差値の下1桁を5年単位で丸めて表示した値である。年代測定値の成果としては、一般的にこの値を用いる。さらに ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲には、暦年較正曲線 (IntCal 13) を用いて算出された暦年代を示している。算出にはOxCal 4.3.2を使用している。暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の偏向 (半減期5,730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近い値として算出されたものである。1 σ 暦年代範囲は、誤差

を含めた¹⁴C年代値に相当する68.2%信頼限界範囲の暦年代であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の値である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。第30図は、第6表の結果を暦年較正曲線上に示したもので、縦軸は¹⁴C年代を示し、横軸は暦年較正年代を示している。

2σ暦年代範囲に着目して暦年代順に結果を整理すると、試料No.2、No.4、No.3、No.1の順に新しくなり、堆積層としてはC区下層焼土、D区下層焼土、D区炭層、C区上層焼土の順となっている。暦年代の値についてみると、試料No.2は7世紀代を示し、飛鳥時代に相当する。試料No.4は暦年較正曲線の傾斜が緩やかとなるため、7世紀後半から9世紀後半と広い値を示すが、高確率の値のみに絞れば684-779calAD (80.5%)ということになり、飛鳥時代から奈良時代に相当する。これらの暦年代は、興福寺創建以前もしくは創建前後にあたり、史料に残る焼失時期よりもはるかに古い。年代値だけを考えるのであれば、試料No.2は山階寺や厩坂寺の時期を、試料No.4は興福寺創建頃の時期を指向する。試料No.3も暦年較正曲線の傾斜が緩やかとなるため、8世紀後半と9世紀後半から10世紀後半と広い値を取るが、高確率の値のみに絞れば877-985calAD (95.1%)であり、9世紀後半から10世紀後半の平安時代中期に相当する。史料からは、元慶2年(878)に鐘楼が焼失したことが知られる。試料No.1は、11世紀前半から12世紀後半を示し、平安時代中期から後期に相当する。史料では、永承元年(1046)、康平3年(1060)、永長元年(1096)に経蔵、鐘楼の焼失が記録されている。暦年代の値のみを考えるのであれば、史料との関係は比較的調和的にみえる。

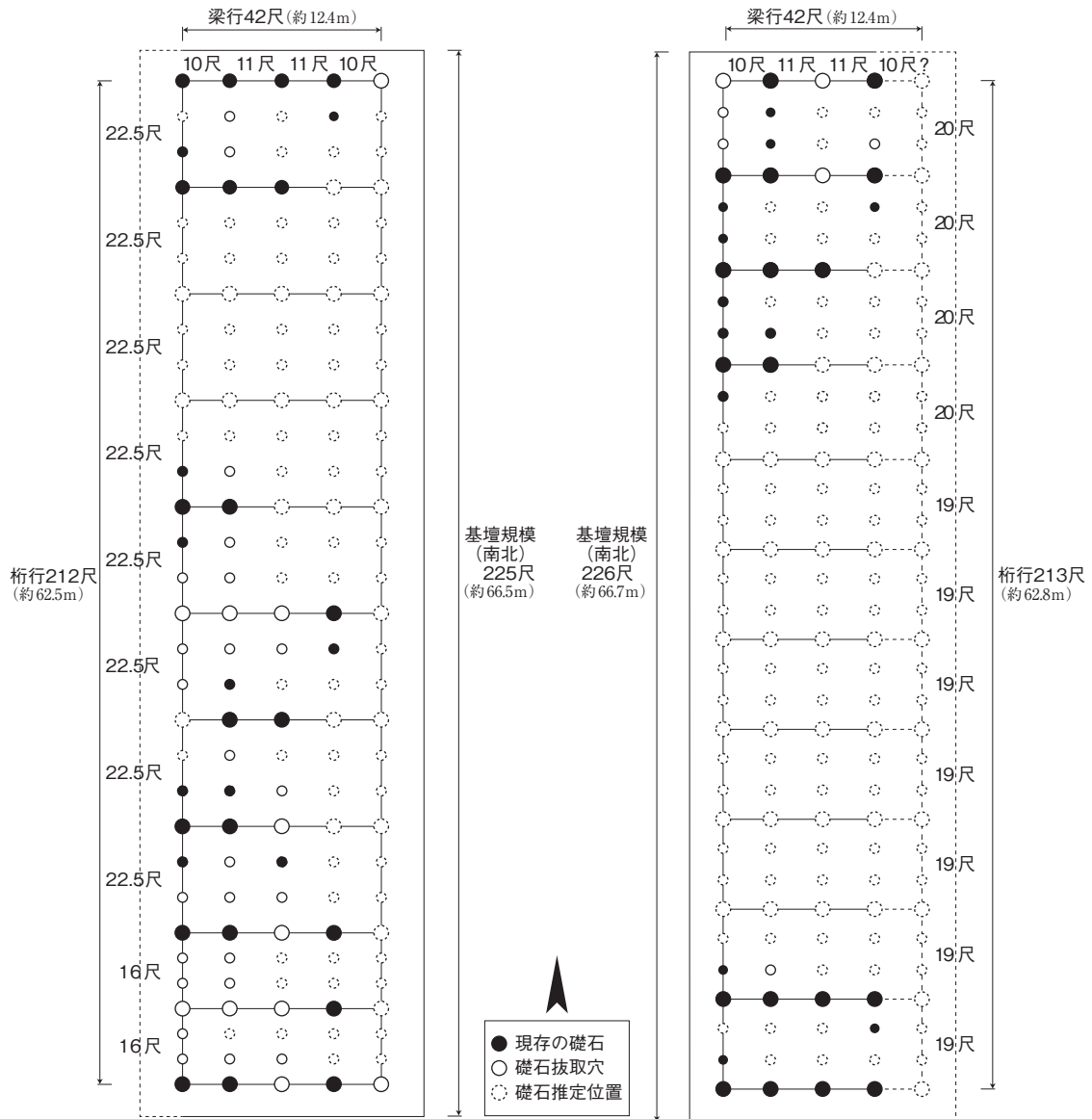
課題 しかし、これらの成果からいくつかの明瞭な課題が見えてくる。まず第30図をみると、4つの試料は暦年代こそ重複するものの、¹⁴C年代はそれぞれの試料間で十分に開いている。すなわち年代測定結果は、異なる堆積層の試料を測定し有意な差を示す異なる年代結果が得られており、各試料の年代測定値そのものは有意な値であることを示しているといえる。その上で、何を計測したかという課題が浮き彫りとなっている。各試料ともに最終形成年輪を欠いていることから、木材のどの部位を計測しているか不明である。もし柱材の破片を計測しているのであれば、部位によってかなりの年代差が出てくるのは当然のことであろう。試料No.4は十分にその可能性があることを示唆している。さらに試料No.2のような、仮定される年代よりもはるかに古い時期を示す場合、古木が転用されるような状況を反映している可能性を考慮に入れなければならない。もし寺の造営に関わり建築部材を移築したのであれば、このような年代測定対象物と実際の使用時期との間に、大きな年差が発生することは容易に想像される。一方で試料No.1のように、見た目として確からしい年代値を得ることができても、史料に対応するほどの精度で年代値を得ることはできないことが多い。つぎに堆積物との関係を考える。当然のことながら前述した課題と同様に、測定した炭化材が堆積物の形成年代を示しているとは限らないことは明瞭である。この結果、1)測定物・測定部位が明瞭な対象を利用した年代測定、2)測定する炭素体の挟在経路の解明、3)堆積物の年代と挟在物(測定対象物)の年代値の比較の大きく3つの課題があきらかとなってきたといえよう。

おわりに 今回の成果として、興福寺創建以前、あるいは創建前後の部材利用の可能性をはじめとして、史料に記される時期の焼失を実証する可能性が出てきた。しかし一方で、興福寺に関わる堆積層序の確認や放射性炭素年代のさらなる蓄積が大きな課題となっていることがあきらかとなったとともに、その課題の克服がさまざまな歴史的事実への鍵となる可能性が示されたと考える。(村田泰輔)

7 成果と課題

(1) 中室の調査成果

中室の規模と柱配置 中室大房は長大な南北棟礎石建物であり、発掘調査の結果、桁行総長は約62.8m（213尺）であることが判明した。柱配置は、発掘調査の成果および地表に露出している礎石の測量成果をふまえると、桁行11間で、北4間分が20尺等間、南7間分が19尺等間とみるのがもっとも整合的である（第31図）。ただし、今回の調査では中室の北端（A区）と南端（B区）を検出したのみで、その間の未調査部分は看過できないほど広い。先学が調査をおこなった昭和前半頃に地表面に露出していた礎石は、その後の境内整備の盛土により、現在では多くが地中に埋もれている。そこで、発掘調査の成果を補完するデータを得るべく、地中レーダー（GPR）による探査をおこなった。その結果、中室の柱筋において点状の反射が見られ、礎石およびその痕跡の可能性を指摘することができた。個々の柱位置を特定するためにはさらなる調査が必要であるが、現時点では、中室の柱配置について



第31図 興福寺西室（左）・中室（右）柱配置復原模式図

は、上述の復元案がもっとも妥当なものと考えておきたい。中室の梁行は、西から3間分が10尺・11尺・11尺であり、以東は現在の参道にあたるため調査できなかった。この寸法は、西室の発掘調査成果と一致することから、中室も西室と同じく梁行4間で総長は42尺、柱間寸法は中央2間が11尺で両脇間が10尺と推定される。基壇の規模は、南北が約66.7m(226尺)で、東西が13.5m以上。基壇の出は、北面と南面がそれぞれ約2.0m(6.5尺)、西面が約2.1m(7尺)、東面は不明である。基壇の北面と南面では基壇外装の地覆石と羽目石が、西面北部では地覆石が遺存していた。これらはすべて二上山産の凝灰岩を使用している。雨落溝は、西面では境内の主要な排水路を兼ねた中世の石組溝SD7623を検出し、その底面で古代の雨落溝の可能性のある南北溝SD10981を検出した。北面では検出されなかったが、元来なかったのか後世の削平などにより失われたのかは判然としなかった。なお西室では、北面の雨落溝は検出されず、基壇東南隅で地覆石に接して石組の雨落溝を検出している。

今回の調査で得られた上記の中室大房の建物規模は、従来の復元案と比べて、桁行が長く梁行が短い。また、西室の場合と同様、『流記』に記された建物規模との不一致が問題となる。

中室と西室の比較 西室大房については、2013年度調査(第516次)と2014年度調査(第540次)により、規模と柱配置が判明している(『概報Ⅶ』)。それによれば、西室大房は、桁行10間、約62.5m(212尺)、梁行4間、約12.4m(42尺)の南北棟礎石建物である。基壇の規模は、南北が約66.5m(225尺)で、基壇の出は南北それぞれ約1.9m(6.5尺)である。基壇の東西規模は明確ではないが、東面の基壇の出は約1.9m(6.5尺)と考えられている。桁行総長と基壇の南北規模は中室の方が西室より1尺長く、基壇の出は中室の西面と西室の東面で若干異なる可能性があるが、建物と基壇の規模は、両者ほぼ同じと言って差し支えないだろう。

一方で、桁行の柱間寸法については、西室は南2間分が約4.8m(16尺)で、それ以北の9間分が約6.6m(22.5尺)である。同じ桁行11間ながら、20尺と19尺を用いたほぼ均等な割付と推定される中室とは、柱配置が大きく異なる。東西対称の位置にある僧房は、柱配置まで含めて対称であるのが一般的と考えられている。その点で興福寺中室と西室の例は、古代の僧房の実態を考える上で興味深い資料を提供したといえる。なぜこのような非対称な柱配置をとったのかについては、全体の伽藍配置や個々の建物の使用法に関わると予想され、今後の検討課題である。

(2) 経蔵・鐘樓の調査成果

経蔵・鐘樓の規模と柱配置 経蔵は、桁行3間、約10.1m(34尺)、梁行2間、約6.5m(22尺)の南北棟礎石建物で、柱間寸法は、桁行が中央間12尺・両脇間各11尺、梁行が11尺等間である。基壇の規模は、南北が約14.5m(49尺)、東西が約10.5m(37尺)。基壇の出は、四周いずれも約2.2m(7.5尺)である。基壇外装は、一部で室町時代以降に据え付けられたとみられる羽目石を確認した。古代に遡る基壇外装やその痕跡は確認できなかったが、再建時に同じ位置を踏襲して据え付けられているためと考えられる。雨落溝は検出されず、基壇北方の小砂利敷に雨垂れの痕跡が見られたことから、雨落溝はともなわれないと考えられる。

鐘樓も経蔵と同じく桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物である。地表に露出している礎石の測量成果によれば、桁行総長は約10.0m(34尺)、梁行総長は約7.1m(24尺)で、柱間寸法は桁行が中央間12尺・両脇間各11尺、梁行が西11尺・東13尺である。梁行が等間にならない点については、梁行中央(棟通り)の礎石列が検出した基壇の東西中央に位置すること、経蔵の梁行中央の礎石列と伽藍中軸線を挟んで

対称の位置にあることから、未発掘のため断定はできないものの、東側柱列の礎石が原位置より東に動いているためと考えられる。本来の鐘樓の梁行は、経蔵と同じく11尺等間であったとみておきたい。基壇の規模は、東西約11.0m (37尺)、南北約14.5m (49尺)で、基壇の出は、北面と西面が約2.2m (7.5尺)、東面と南面は不明である。基壇外装は、一部で室町時代以降のものとみられる羽目石を確認した。雨落溝は確認していない。なお、享保2年(1717)の焼亡前後に描かれた『興福寺建築諸図』によれば、鐘樓の梁行は10.8尺等間である(6頁)。同図はおよそ当時の礎石の上に再建しようとした計画図とみられることから、近世に焼失した鐘樓が建てられた室町時代以降、礎石の位置は変わっていないと考えられる。したがって、鐘樓の東側柱列の礎石は、『興福寺建築諸図』の作成以降に何らかの事情で東へ2尺ほど動かされた可能性がある。

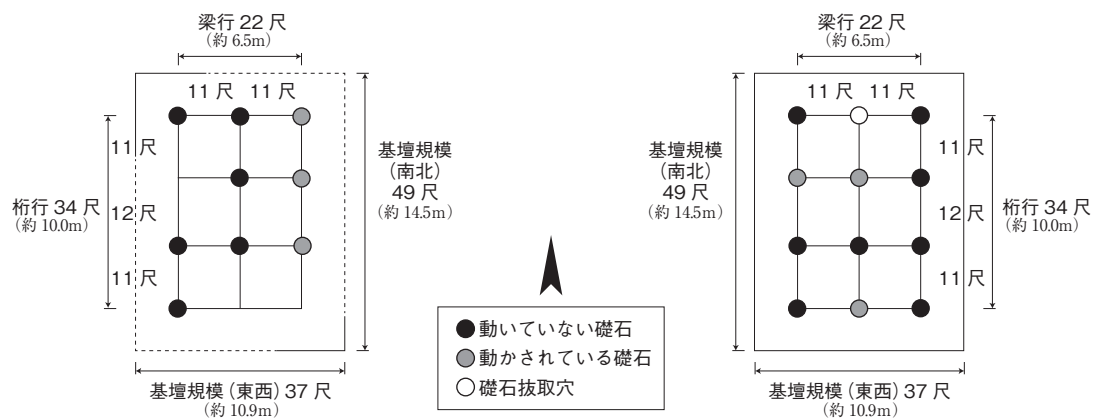
以上の点から、経蔵と鐘樓は、伽藍中軸線を挟んで東西対称の位置にあり、規模と柱配置を同じくする双子の建物であったと考えられる(第32図)。経蔵と鐘樓の両樓を発掘調査で確認した事例はなく、予想された成果ではあるが、その実態をあきらかにできた意義は大きい。

鐘樓の規模は変化したか 今回の調査で得られた上記の建物規模は、『流記』の記述と整合的であり、従来の復元案(大岡實説)を支持するものである。一方で『流記』によると、鐘樓は8世紀中頃から9世紀初頭にかけては、長さ46尺(約13.6m)、広さ35.3尺(約10.4m)で、経蔵より規模の大きな建物であった。桁行・梁行ともに経蔵より柱間1間分程度大きく、規模の拡大や縮小には建替に近い工事をともなうと推定される(6頁)。しかしながら今回の発掘調査では、建物の建て替えや基壇規模の拡張・縮小の痕跡は、確認できなかった。

ただし、鐘樓基壇の北方と東南方で、創建期に遡る可能性のある小礫敷を検出していることは注意される。小礫敷の検出範囲は、長さ=桁行総長46尺とした場合の基壇と重複する位置にある(基壇の出は桁行総長34尺の場合と同じとする)。小礫敷が創建期に遡るとすれば、鐘樓は当初から経蔵と同規模であった可能性がある。『流記』の鐘樓の記載については袴腰の下端の規模を記している可能性があり(6頁)、両樓は創建期から一貫して同規模であったとみることも一案であろう。その場合、8世紀中頃～9世紀初頭は鐘樓のみが袴腰付きで、両樓の規模は同じながら、外観が異なっていたことになるかもしれない。さらなる検討が望まれる。

(3) 建物周囲の様相

経蔵・鐘樓北方の石組溝と玉石敷 経蔵と鐘樓の北方には、東西方向の石組溝が設けられており、



第32図 興福寺鐘樓(左)・経蔵(右)柱配置復元模式図

そのさらに北方には、東西方向の玉石敷が敷かれていた。

石組溝の心は、経蔵・鐘樓の北側柱筋の礎石心より北に約4m離れている。『興福寺建築諸図』に見える経蔵や鐘樓の軒の出は12.5尺(3.8m)前後と計測でき(7頁)、それらの雨落溝とみるには若干遠い。溝底の標高からみて、講堂周辺の雨水を東と西へ、もしくは東から西へ排水する機能を担ったものと推定される。石組溝の延長は、講堂基壇の東西両側面の南部にあたる(第33図)。講堂南面の雨落溝は石組であり(『興福寺仮金堂建設工事報告書』興福寺、1975)、講堂の四周を巡る石組の雨落溝に接続していた可能性も考えられよう。

玉石敷は、いずれも北端を検出しておらず南北の規模は不明であるが、広範囲に敷き詰められたものではなく、経蔵西方の玉石敷SX8085のように、2m程度の幅をもつ通路状の遺構と推測される。その場合、経蔵北方の玉石敷SX10985を東へ延長すると、中室大房の北から5間目にあたり、さらに東の延長上には、食堂から西に延びる軒廊がある。西へ延長すると、講堂基壇の南部にあたる(第33図)。「肝要図絵類聚抄」(興福寺蔵)によると、講堂基壇の東西両側面には、南方に寄って階段が描かれている。鈴木嘉吉は、講堂前端の間と食堂の間とは軒廊によって結ばれており、それが中室大房の北から5間目を馬道として貫くと推定した。今回の調査では軒廊の痕跡は確認できなかったが、玉石敷SX10985は、食堂と講堂を結ぶ通路の存在を示す点で、鈴木説を裏付ける遺構といえるだろう。中室大房の北から5間目が馬道にあたるのであれば、馬道より北は柱間寸法が20尺、南は19尺となり、馬道を境に北と南で僧房の規模が異なっていたことになる。

なお、鐘樓北方の玉石敷SX10995についても、西室と講堂を結ぶ通路としての機能を想定することができ、西に延長すると、西室大房の北から4間目の南端付近にあたる。

玉石敷・石組溝の築造と廃絶 築造時期について、石組溝は基盤層直上に据え付けられており、創建期に遡る可能性が高い。玉石敷は石組溝と併存していたとみられるが、石組溝より遅れて敷設された可能性もある。経蔵西方の玉石敷SX8085は、第325次調査区では下層に焼土が確認されていること(『概報Ⅲ』、2002)も留意される。

廃絶時期について、経蔵北方の石組溝SD10980は、中世の石組溝SD7623に壊され、経蔵北方の玉石敷SX10985は、土坑SK10986に壊されている。土坑SK10986からは12世紀後半頃の土器が出土しており、火災を契機とみれば、治承4年(1180)の南都焼き討ち後に、経蔵北方の石組溝と玉石敷はともに機能を停止したと考えられる。鐘樓北方の石組溝と玉石敷にも敷衍できるとすれば、南都焼き討ち後の復興の過程で、基壇建物周囲の景観が大きく変わった可能性もある。



(桑田) 第33図 経蔵北方の石組溝・玉石敷と講堂(東から)

報告書抄録

ふりがな	こうふくじ だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはくつちようさがいほう はち							
書名	興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅷ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	桑田訓也・箱崎和久・林正憲・神野恵・芝康次郎・金田明大・村田泰輔							
編集機関	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市佐紀町247-1			Tel 0742-30-6753				
発行者	興福寺							
所在地	〒630-8213 奈良県奈良市登大路町48番地			Tel 0742-22-7755				
発行年月	西暦 2018年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうふくじあと 興福寺跡 こうふくじきゅうけいだい 興福寺旧境内 なごうえん 奈良公園	ならけんならし 奈良県奈良市 のぼりおおじちよう 登大路町	29201	05D-0019	34度	135度	2015.10.2	841.5	境内整備
		29201	05D-0019-A	40分	51分)		
		29201	05D-0102	48秒	46秒	2016.1.15		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
興福寺旧境内	社寺	奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代 明治時代	僧房(中室) 経蔵 鐘楼 礎石建物基壇 石組溝 玉石敷 築地堀	瓦 土器 金属製品 冶金関連遺物 植物遺存体	<ul style="list-style-type: none"> ・中室大房の建物南北規模、基壇南北規模が判明した。 ・経蔵、鐘楼の建物規模、基壇規模が判明した。 ・経蔵、鐘楼の北側で東西方向の石組溝、玉石敷を検出した。 			



2018年3月20日 印刷

2018年3月30日 発行

興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅷ

編集 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

発行 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48番地

印刷 能登印刷株式会社
